

ナイチンゲール ― 女性の専門職を創設する

― 19世紀は女性の世紀 ―

広島文化学園大学看護学部

佐々木 秀 美

■ はじめに

人の精神は経験や活動という社会過程のみでのみ、その存在を持ち、発展させている。ゆえに、精神は社会過程を前提とする。よって、ある対象に関して私達がその思考を完全に明瞭にするためには、対象がおおよそどれくらいの実際的な結果、つまり行為として表出されたかを観察することである。そこには必然的に対象の教育思想が反映される。

筆者は既に報告したナイチンゲールの思想研究、『ナイチンゲール教育思想の源流 日常生活は心に問いを抱かせ、知性はその問いに答えを要求する』¹⁾、『ナイチンゲール精神的危機から自立へのプロセス』²⁾、『ナイチンゲールイギリス陸軍を改革する―学習(経験)したことから学習せよ』³⁾などからも明らかなように、ナイチンゲールはイギリス経験認識論を引き継ぎ、現実社会の観察で得られた情報とその分析によって問題を明確にし、その問題の解決・改善・改革を積極的に推進した女性であった。その意味でナイチンゲールは哲学者であり、科学者でもあった。そして、ナイチンゲールは誰よりも“Learning to learning 学習(経験)したことから学習する”の精神の持ち主であった。

それでは、ナイチンゲールがなぜ、看護教育を開始したのか？その問いに答えるには、イギリス社会で彼女自身が経験した、その問題に焦点をあてなければナイチンゲールの教育思想は理解できない。

“19世紀は女性の世紀”この言葉は一般にジョ

ン・スチュワート・ミル⁴⁾の言葉として有名である。しかし、19世紀は女性の世紀という言葉の真の実現はナイチンゲールに始まる。ナイチンゲールは、“19世紀は女性の世紀”となるにちがいない、という古い言い伝えがある⁵⁾と述べ、この時代ほど女性がその能力を開発する自由ばかりでなく、その機会を与えられている世紀はかつてないのに、行動のための女性の教育と知識のための教育とが足並みをそろえていないと述べた。女性が一人の人格として尊重される事、これは重要な問題であった。ナイチンゲールが、なぜ、女性達は抽象的概念を理解する事ができないのか？なぜ女性達は創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか？との疑問を持ったのは、1846年のことである。この問いに真っ先に答えたのは彼女自身の知性であった。

かつてオーギュスト・コント⁶⁾は、「女性には知的作業には極めて不適格」⁷⁾との意見を述べ、それは知性の内在的な弱さのせいであると述べた。コントは、女性には知性の内在的弱さの為に知的作業にはふさわしくないと結論づけたが、ナイチンゲールは女性に対する教育の欠如こそが女性の内在的知性の欠如を生んでいると考えた。そして、その内在的知性の欠如が無知を生み、社会的不平等を受け入れる根源になっている。ゆえに、その問題の解決には、女性に適切な教育を施す必要があると考えた。彼女と同じようにミルもまた、体系的な訓練や教育の機会が女性には少ないと述べている。

佐々木秀美著『ナイチンゲールとミルとの論争―ヒューの論文を手がかりに―』⁸⁾によれば、両

者ともに家庭内教育において、「子供達は、服従という手段で一時的に訓練されることによって、その感情と好意を習慣的なものとし、ついにはそれを第二の天性として身につける」⁹⁾ という見解については一致していたが、女性の権利問題では両者間には見解の相違があった。ミルは、女性達に参政権を与えれば、女性は女性達に課せられた様々な諸問題を女性達自身で解決することができる。さらに、女性を社会に解放し、女性に職業選択の自由を与え、男性と同じ仕事分野と同じ報酬を与えることによって、女性の才能が自由に用いられるようになる¹⁰⁾ と考えた。他方、ナイチンゲールは、権利には自己責任と義務が伴う。よって、その権利を執行する際には、責任と義務が果たせるに相応しい人格が備わっていなければならない。そして、その人格には自身の生涯における意志決定を自身で責任を持って為すという意味が含まれた。女性に人格が与えられるとしたら、その権利を有するに相応しい資質を具有する必要がある。ゆえに、女性を社会に解放する前に適切な教育が必要である。しかし、男性に開かれている全職種に女性を開放するのではなく、その職業が女性に適しているかどうかを十分に吟味し、準備されるべきであると考えた。

次に、クリミアでの経験はナイチンゲールに平時から看護師の訓練をしておく必要性を感じさせていた。ナイチンゲールは、戦争状態というものが、国同志の政治的な解決法として、為政者が選択した武力行使という手段であるならば、恐らく戦争状態を今後とも回避できるとは考えなかった。又、再び、戦争が起きないとはいえない。その時のために平時から看護師を訓練しておく必要がある。クリミア戦争で死んだ兵士達との約束、陸軍を改革するという約束は、少しずつ果たされ始めていた。ナイチンゲールの進言を取り入れたヴィクトリア女王の勅撰委員会機能の効果が始め、「女王陛下の陸軍」として不動の地位と組織を誇っていた陸軍の改革は、真に実現されようとしていた。

『ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ』¹¹⁾ で報告したように、ナイチンゲールによれば、女性にシステム的な教育を与える事、即ち、教育環境として整備された教育機関で医学的な教育を受けさせることによって“看護師”という新しい職業を生みだし¹²⁾、教育を受けた看護師達が病院で患者の回復に向けた支援と健康教育

を成す。その事によって、患者の健康が回復し、再度、社会において生き生きとした活動的な生活をする事が可能になる。

加えて人々が生活する地域の公衆衛生は究めて重要であり、その教育・普及に女性達が参加することによって国民全体の健康の保持・増進に繋がる。ナイチンゲールは、「明確な目的は実現していかなければならない」¹³⁾ と述べ、看護教育の目的は病院看護をより良くしていくことであると述べている。そして労働によって自らの生活の糧を得ようとする女性達を可能な限り訓練し、組織化していくことであると述べている。それは女性達の雇用の促進にもなり、社会的・経済的自立にもつながる。女性達の社会的自立は、その精神性を高め、その精神性が高まれば将来への不安から“生ける屍 (dead body)” 状態から脱却できるのである。その状態から脱却ができたとき、初めて、女性達の精神はよみがえり人間性を取り戻すことができ、一つの人格を持ちえるのであった。ナイチンゲールはカイゼルスウェルト学園での短期間の訓練でそれを経験していた。

医療の中で、女性の専門職を創設すること、それはナイチンゲールが述べたように、実験的試みであった。彼女は、「訓練とは何が成されねばならないかだけでなく、どの様に成すべきかも教える事である。」¹⁴⁾ と述べ、看護師がどうあるべきかについて、又、どう教育されるべきかについて詳しく述べている。そこで、本論ではイギリス社会における女性問題と公衆衛生の問題に焦点をおきつつ、ナイチンゲールが実施した看護教育から、ナイチンゲールの教育思想について論じる。

■ 女性に人格を与えよ

1) “女性の権利” 運動の始まり

フランス革命に代表される“人権思想”は、次代を担う多くの思想家達を刺激し、多くの先進国がこの思想を制度の中にとり入れた。わが国でも戦後、発布された憲法はこの主権在民の民主主義思想であり、この憲法の全文に漲っているのは国民の基本的人権である。そしてこの基本的人権で求められた“自由と平等”という思想は男女の別を問わない。しかし、かの大思想家ジャン・ジャック・ルソー¹⁵⁾ でさえ忘れたのが女性の人権の問題であった。そしてこの“自由と平等”という人権思想は女性にも適用されるべきであるというの

が、当時の女権拡張運動家達の主張であった。

“女性の権利 (Women's Right)” 運動は18世紀のフランス革命以降、女性が平等に取り扱われていないことに気づいた思想家達を中心に展開された。オランプ・ドウ・ゲージュ¹⁶⁾ は『女性の諸権利』という小冊子に、女性及び女性市民の権利宣言を書いた。その前文には、「母親・娘・姉妹達、国民の女性代表者たちは、国民議会の構成員となることを要求する。そして女性の諸権利に対する無知、忘却または軽視が、公の不幸と、政府の腐敗の唯一の原因であることを考慮して、女性の譲り渡すことのできない神聖な自然的権利を、厳粛な宣言において提示することを決意した。」¹⁷⁾ と述べられ、法のもとに女性も男性も平等であることを、第1条から第17条までの条文によって主張した。自然的権利とは当時主流であった自然法¹⁸⁾ における個人の権利のことをいう。特に自然の権利の中で忘れられていた女性の権利の問題がここにあった。この運動はその後、サン・シモン¹⁹⁾ を中心に“女性解放”運動となって展開された。

こうした運動の中でフランス女性フローラ・トリスタン²⁰⁾ は、女性に対しても労働する事を認めさせようとした。彼女の思想はオーウェン主義者²¹⁾ を経由して、マルクス主義思想²²⁾ へと繋がった。1792年に、メアリ・ウルストンクラフト²³⁾ は『女性の権利の擁護』という著作の中で、イギリスの市民革命に思想的な役割を果たしたジョン・ロック²⁴⁾ の理性による教育を、女性にも適用するべきであると主張した。彼女は男女間の不平等を指摘、こうした不平等を取り除くには、女性も職業に就くことが大事であると述べた。著作の中でウルストンクラフトは「深い憂慮を抱いて過ぎし歴史に思いを巡らし、また眼前の世界を観察してみた時、私の精神は悲憤の感情によって極度に憂鬱になった。そして自然が人間と人間との間に大きな差別を作ったのか、あるいは、これまで世界に現れた文明が極めて偏ったものであったのか、そのどちらかを認めざるを得なかった時、私は溜め息をついてしまったのだ。」²⁵⁾ と述べ、女子教育の無視こそが女性差別の現実の根源であると述べている。ウルストンクラフトは、女性には医学を学んで看護師のみならず、医師にもなれると述べ、職業をもって働く女性の貴い価値について言及している。

家庭内の男女の不平等についてはサン・シモン主義者²⁶⁾ であり、功利主義者²⁷⁾ であるジェレ

ミー・ベンサム²⁸⁾ が、“女性の幸福と利益は男性のそれと同等である”と述べ、女性の立場を擁護した。ベンサム主義思想であったナイチンゲールの父親、ウィリアム・エドワード・ナイチンゲール²⁹⁾ は、ナイチンゲールに男性同様の教育を施した。向学心の強かったナイチンゲールの知識はこの頃、当時の女性達あるいは男性たちをも遥かに上回るものであったろう。そして、ナイチンゲールは“早すぎた目覚め”の苦悩を経験したのである³⁰⁾。

19世紀に入って、女性に対する運動も少しずつ高まりを示し始め、1824年には、フランスの思想家達の強い影響を受けて、『人類の半数である女性の訴え』という本を書いたのがウィリアム・トムソン³¹⁾ である。彼が女性を擁護して社会主義思想に転じていく中で、ベンサムと同思想であったミルの父親、ジェームズ・ミル³²⁾ (以降 J・ミルとする) はトムソン等と反対の立場を取った。しかし、J・ミルは妻であるハリエット・テラー³³⁾ の影響を強く受け、女性解放主義運動に次第に参加するようになった。彼等の“女性解放”運動の手始めは婦人の参政権運動であった。1832年、イギリス国会の第一次選挙法改正において婦人の参政権問題が取りあげられた。しかし、“女性の権利”運動は当時のイギリス社会においては、あまり受け入れてはもらえなかった。結果的に J・ミルの立場が優位となり、女性に参政権は与えられなかった。イギリス社会における“女性の権利”問題は、J・ミルを代表とするようなある一部の知識階層から取りあげられていた問題でもあり、社会全般に考えるとまだ、ほんの一握りの主張にすぎなかった。その頃の、イギリス社会では、労働者階級の男性ですら参政権を有していない実情があった。加えて、当時のイギリス社会においては、明治以降の日本社会同様、女性の教育に関しては、フランソワ・ド・サンニャック・ド・ラ・モード・フェヌロン³⁴⁾ が提唱した良妻賢母主義教育が中心になっていた。わが国も憲法の精神とは別に女性に対してはある一面においては従来の、他方においては特定のといったように理解しあえている問題とは思えないのが“女性の権利”である。“女性の権利”問題から、女性にも教育が必要であると考えたのがナイチンゲールである。彼女自身が体験したように又、J・ミルが『女性の従属』³⁵⁾ で指摘したように女性達は男性に隷属する者として取り扱われ、一人の人格を持つ人

間として取り扱われなかった。

女性の権利問題が主張される中、国内の経済状態は悪く、国民が二層に分かれるのではないかとと思われるほど、貧富の差が大きくなっていた。そうした中で、J・ミルやベンサム等は、雑誌『博愛主義者』を発刊するなどして、富めるものが貧しいものに施しをすることを基本原理とした運動を行った。この運動は人道的な立場からの運動であり、ノーブレス・オブレッジ（Noblesse-oblige）とも言われている。上流社会の娘として生まれ、ベンサム主義者の父親を持つナイチンゲールはこの運動の中にあつた。

“生きる”この問題のために多くの女性達が体を売り、精神を病んでいるとナイチンゲールは考えた。キリストは山上の崇訓で“野の花をみよ”と弟子達に説いている。これは明日、何を着、何を食べようかと思ひ悩んではいけない。野に咲いた花でさえ、神が与えた自然の中であればほどに美しく咲き誇っていられるではないか。神を信じ、物欲を抑え、魂を清らかにすれば、又、あの野の花のように明日もまた咲き続ける事ができるのだという教えである。“山上の崇訓”はキリスト教教義の“唯心論”（spiritualism）といわれる思想の急先峰である。しかし、現実には多くの女性達が明日への不安から生ける屍になっていた。ナイチンゲールは神が女性達を生ける屍にするためにお造りになったとは思えられない³⁶⁾。このような状態は神の望みではない。ナイチンゲールは、神のなさる事は完璧であるはずだと考えた。神のなさる事が完璧であつてしかも、女性達が何もしないでいるようにできているのであれば、彼女の考えでは、女性達はこれを受け入れるように作られているべきであり、不安な感情等起きるはずはなかった。しかし、現実には多くの女性達が不安な毎日の中でその精神は崩壊したような状態であり、生ける屍状態になっていた。

女性達のこの現実を神の仕業であると考えないナイチンゲールは、女性達にも神の教えに通じる仕事があると考えた。しかも、現実主義者であるといわれるナイチンゲールは、キリスト教の“唯心論”的考え方の中にあつて、その考え方だけでは女性達は救われないと考えた。そして、人間の基本的要求である衣食住の保障が女性達の精神を安定させ、その精神を教化することができると考えたナイチンゲールは、キリスト教の精神の単なる“唯心論”者であつただけでなく、同時に“唯

物論”者でもあつた。“唯物論”（materialism）とは精神に対する物質（material）の根源性を主張する立場である。物質から離れた靈魂・精神・意識を認めず、意識は高度に組織された物質の所産と考える立場をいう³⁷⁾。“唯物論”者は自然科学の発達に伴って、宗教的な権威と伝統に抵抗したマルクス主義的思想に多いといわれる。

女性達を救う手段としてナイチンゲールが、まずは正当な雇用を促進し、相応な生活費と蓄えとを保障する事、そして数の多少を問わず、ともかく貧しいけれども節操のある女性達をできる限り保護し、自制させ、高めさせ、そして清める事が明白な目標であり、実りをもたらすことであると述べた。ナイチンゲールの看護教育の目的はこの言葉から考えることができる。社会における不徳な女性達を有徳にすること、それは単に修道女会に入つて精神を教化させるようなものではなく、もっと現実的な対応、つまり、女性達がいかに自立して生きて行けるかという問題であつた。即ち、今日、法的に規定されている人間の基本的人権、その内の一つ“生存権”の問題もここに存在する。

19世紀は女性の世紀であるといわれているのにそれが女性の世紀になっていない。それは何故か、男性のせい？いや、違う！それは女性自身のせいなのである。多くの女性達が男女の従属関係を肯定し、“権利と義務”からは遠くかけ離れた状況にあつた。ナイチンゲールがその知性を何かに役立てたいと考えた時、特に、彼女の母親や姉は彼女の自立を執拗に反対した。彼女自身が経験したように、母親や姉に代表されるように、当時の多くの女性達は女性の人権問題に対し稀薄であつた。

女性達もそれを矛盾とも考えないで従順に受け入れていたのである。この女性の権利に関してナイチンゲールは、「男性と女性の権利と義務は平等であるというのが認められないのは男性でなくむしろ女性であり、“権利と義務”に対して鈍感なのは女性達である。」³⁸⁾と述べた。ナイチンゲールの言葉に従えば、男性と女性の権利と義務は平等である、がしかし、その権利を認めないのは男性でなく女性であり、“権利と義務”に対して鈍感なのは女性達であつた。伝統的な社会規範から考えた場合、家庭内における男女の役割が男女の従属関係を規定しているとは決して考えず、女性にはそういった類いの教育が必要であると考えていた。

様々に引き起こされている社会現象から、ナイ

チンゲールは、問題解決のための手段として、女性達に対する現実的な分析を行い、女性達をまず教育しようという着想が生まれたのであろう。即ち、当時の女性達に不足している知性、倫理的な行動力、情熱を女性達が具有させる事、そうした徳性を具有する事によって職業を持ち、経済的に自立する事が女性達の精神を教化し、自立にも繋ると考えた。つまり、彼女は女性達を教育的手段によって訓育し、一人の人間として社会に適応させる事を考えたのであろう。

2) イギリス女子教育の実情

イギリスにおける女子教育は一般的にお粗末なものであった。イギリスではナイチンゲールのような上流社会の子女達のみが、ある一定期間家庭で教育された後、無秩序な寄宿舎付きの私立学校で教育された。その教育は礼儀作法や音楽、ダンス等社交界に必要な教育および家政的な教育が主流であり、その内容も一貫していなかった。1846年にナイチンゲールが父親に宛てた手紙の内容、「なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。なぜ女性達は男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか？」³⁹⁾でも分かるように、この当時の女性達は無学な者が多かった。しかし、ナイチンゲールの生きた時代、高い学識を持ち得たナイチンゲールの方がむしろ特別であり、一般にこの当時の女子教育は良妻賢母主義思想が反映され、行儀作法や家政中心主義であった。この教育に関わったのがガヴァネス (Governess) と呼ばれる家庭教師である。しかし、家庭教師になれるほどの教育を受けられるのも限られた人達であり、一般大衆は無学なものが多かった。ナイチンゲールの様な上流社会の子女は学校へは行かずに家庭において教育されるのが通常であった。労働者階級と女子教育は階級と性の二重差別構造があったことも否めない。

宗教団体は貧民保護のために犯罪者や負債を負った人々が、難を逃れる緊急避難場所的性格を持つアサイラム (Asylum) と高齢者、孤児、病人など世話が必要な人々の一時宿泊所あるいは養育院的性格のホスピタル (Hospital) という二種類の施設をつくった。中世から存在していたこのアサイラムは18世紀末には狂気を根絶するための施設として考えられるようになった⁴⁰⁾。アサイラムに狂人を収容して、治療的な側面で関わった最

初の人物はウィリアム・バットィ (William Battie) である。バットィは1751年の時点で、アサイラム、ロンドンの聖ルカ病院を創設した医務官である。また同時に彼は二つの大きな私立の狂人の家の所有者であり、医学専門学校の校長でもあった。バットィは治療上の長所をアサイラムに帰しており、一種の隔離療法によって患者の回復が可能であると考えた⁴¹⁾。しかし、当時、多くの精神障害者たちは救貧院に収容されていた。キリスト教的救済、つまり、宗教的性格が強かったこれらの施策にたいし、国家が介入した救貧法では不労生活者は犯罪者もしくはその予備軍として扱われ、国家の安全を脅かす者に対しては、他の人々から隔離して懲罰や教育を与え、その性格を改造しようという意図があった⁴²⁾。

イングランド最初的女子基本財産学校 (endowed school) における教育では、女子は女中見習いとして、自分や男子生徒の服とシャツを縫い、家事を学ぶことが学習課題であった。この学校はクライスト・ホスピタル (Christ's Hospital) という孤児院兼教育施設の付属学校であった⁴³⁾。ちなみにナイチンゲールが看護師学校を付属させたセント・トマスホスピタル (聖トマス病院のこと、以降聖トマス病院とする) もトマス・ア・ベケット⁴⁴⁾ ゆかりの施設であったが、エドワード6世⁴⁵⁾ の基金を受けたロンドン市長が、貧民対策として高齢者と病人を収容するホスピタルにした。聖トマス病院は、後に今日の病院の機能を果たす施設になった⁴⁶⁾ とされる。

初等教育に関わる教育者教育は、19世紀半ば頃から普及し始めたが、これも貧民の子が対象であった。女性が男性と同じ社会的地位を確保できる唯一の例外は、学校教師への道であったが、女教師には十分な教育の保障をしなかった⁴⁷⁾。教育内容はシャーロット・ブロンテ⁴⁸⁾ の著作『ジェーン・エア』⁴⁹⁾ で記した様な内容であり、その内容はブロンテ自身が実際に経験した事であるといわれている。著作によればその教育内容には、「読・書・算」の他に音楽、図画やフランス語などの科目が含まれた。それもやはり令嬢教育ができる為の必須条件であり、主として社交の場で必要なマナーや会話に必要な知識中心であった。権利や義務には無関心で社交に明け暮れている女性達に対してナイチンゲールは、「知性の足だけが前に進んで来ているのであって実践の足は後ろに残ったままの状態である。その意味で女性は斜めにたっ

ている現状なのである。即ち、行動の為の女性の教育は知識の為の教育と足並みを揃えていない。⁵⁰⁾と考えた。

上流社会の人達が高い教育を受けていても、それを何等社会に役立てるわけでもなく、ただ、お互いに“知っている”事をひけらかし、競争するだけの為教育を受け、知識を集めていることが非常に無意味であると考えたナイチンゲールは、理論 (theory) と実践 (practice) は一致していなければならない、知識 (knowledge) と行動 (action) はバランスが取れていなければならないと考えた。後年、エミール・デュルケイム⁵¹⁾ は、理論は特に実践が伴わなくても、学説としては十分通用すると述べたが、ナイチンゲールの主張では、実践が伴わない理論は空論であった。よって、ナイチンゲールが構想した看護教育では理論と実践の一致は主要な課題であった。勿論、理論と実践の不一致、知識と行動とのアンバランスという現象は、紳士である男性にも同様なものがあつた。サイモンの『イギリス教育史』⁵²⁾ によれば紳士教育というものは、わが国平安時代の宮中の皇族方が和歌や文芸に親しんだように、ヨーロッパの古典や歴史に通じていれば良かったのである。つまり、働くように教育されるものではなかった。

彼女の考えでは、そうした知識はそれを必要とする者の為役に役立てなければ何にもならない。即ち、行動する事が大事であつた。しかし、ナイチンゲールの様に知性、道徳的行動力、情熱を持った女性達に働く場所は開放されておらず、その選択権もなく、自立できる可能性は少なかった。何故、女性は情熱、知性、道徳的行動力といった3つの徳性を具有しているにも拘らず、そのいずれもが社会で生かされないのか⁵³⁾？これはナイチンゲールの率直な疑問であつた。『カサンドラ』⁵⁴⁾ におけるナイチンゲールの主張は、当時の社会における女性に与えられていた権利や役割に対する挑戦であり、彼女の強い意志の現れでもある。

家庭教師による教育はヨーロッパの伝統的教育ではあつたが、彼女の父親は彼女の知的好奇心を満足させるべく当時の男性同様、あるいは当時の男性よりも優れた教育を受けさせた。この父親の教育を通して知的に育ったナイチンゲールは、当時の社会を広く見渡せる高い視野を持った女性であつた。当時の女性達の多くが受け入れてきた伝統的な生き方に対して、女性達に課せられた運命を矛盾として受け止め、女性であっても理想を

持つて生きる必要があるのだと賢明に主張した。自分の人生に対する責任、このことを選択するのは自分自身である。ナイチンゲール流に考えれば、神が女性に与えた知性を活用する場所、それは家庭にもある。しかし、彼女は自己の辛辣な観察から家庭外のもっと広い場所、即ち、社会で生かすことはできないかと考えた。実際には彼女の様に知性、道徳的行動力、情熱を持った女性が自立できる可能性は少なく、弱者としての女性は、子どもと同じように保護されるに相応しい存在であり、自己決定権を持たなかつたのである。それは人格と呼ぶには程遠い存在であり、そうした女性の生き方は無為であるとナイチンゲールは考えた。

女性達を救う手段としてナイチンゲールは「今の時点では最も重要な事はこうした大勢の人々に対して、その悲惨さを軽減する事と、この恐ろしい罪を犯す機会と誘惑とを抑制することに焦点を当てるべきであつて、この後者を成し遂げるのに教団の中であるのが、最も良いなどと考えて少数の人間を精神的に高める事に焦点を当てたりすることではないのである。」⁵⁵⁾ と述べ、まず、正当な雇用を促進し、相応な生活費と蓄えとを保障する事、そして数の多少を問わず、とにかく貧しいけれども節操のある女性達をできる限り保護し、自制させ、高めさせ、そして清める事が明白な目標であり、実りをもたらすことであると述べている。

3) イギリス労働者階級の実態

今日、日本人の多くは職業を持つており基本的には労働者である。武家社会における身分制度、その“士農工商”という階級社会の中で、政治を司った武家の比率は全体の約1～2割、続いて農工商が残りの8割～9割であつたとされる。日本同様、階級社会であつたイギリスでも、政治を司っていたのは上流社会であり、その比率は国民全体の約1～2割、都市および農村の人口の約8割～9割が労働者階級であつた。この労働者階級の人達にはそれなりの暮らし向きがあり、それなりに楽しむ術もあつたろうが、本質的には資本家の富の搾取によって経済状況は悪く、毎日が貧困との戦いであつた。加えて産業が発展し、都市に人口が集中するようになると町はスラム化し、悪の温床になっていた。そうした社会状況の中で、働かなければ食べてはいけぬ労働者階級の女性達には過酷な現実があつた。出産と育児、その上、過酷な労働、これではキリスト教の教義である男女

の役割の方がまだ人間らしい。少なくとも神が人間に与えた罰は男性には労働の苦しみ、女性には生みの苦しみであり、それぞれ平等に一つずつだったのだから。

この階級の状態に関してカール・マルクス⁵⁶⁾は、『資本論』⁵⁷⁾の中で、機械が従来必要としていた筋力を不要にし、代わりに機械は筋力のない労働者、即ち、婦人および児童をその筋力労働の代用物にしたと述べている。産業革命によって資本家が工場に機械を導入した事によって、男性の労働から安価な女性労働、又は子供の労働に切り替わったのである。その上、この労働は機械を休ませない為に、昼間労働・夜間労働の交替制を取っていた。ゆえに労働者達は12時間から18時間という長時間の労働を課せられ、“白色奴隷(white slaves)”と命名される程の状況下で、事実上死ぬまで働かされた。フリードリッヒ・エンゲルス⁵⁸⁾は「どちらを向いてもいたるところに我々は、永続的あるいは一時的な貧困を、こうした状態あるいは労働から派生する病気を、墮落を見出だす。」⁵⁹⁾と述べている。この様に当時の多くの労働者が最悪の生活環境の中で、長時間に及ぶ労働にも関わらず賃金は低く、貧困の中で栄養失調となって、生命は蝕まれ、子供達は饑餓状態で放置された。

上流社会の人々の中にも弱者救済の機運は持ち上がってはいたが、現実にはその手当てはなかなか困難であった。エンゲルスは何度かアンソニー・アシュレイ卿⁶⁰⁾の主張を文中に挿入している。アシュレイ卿という人は炭鉱に調査団を送り、1842年に“炭鉱法”を成立させた事でも有名である。この後、1844年に彼の下院における“10時間工場法案”に付いての演説は、マルクスも『資本論』に引用したほどである。そのほか、マルクスは当時の月刊誌『公衆衛生』の内容を一部引用しながら、労働者達の過酷な状況を供述している。上流社会の人々が病気になっても多くは自宅で療養していたこの時代、貧乏な人々を収容している病院の状況はさらに悪く、暖房もなく、窓は締め切られ、壁はどこも湿り切って滴が垂れ、細菌が繁殖し、病人は看病する者もなく放置されていた。ナイチンゲールが、1840年の時点でアシュレイ卿から手渡された資料も、マルクスやエンゲルスの指摘とほぼ同じような内容であったのかもしれない。実際、ナイチンゲールは、オーウェン主義者と言われているジョージ・ジャイコブ・ホリオーク⁶¹⁾を友人に持ち、彼らとの交流を通し

て上流社会の婦人というだけでは知る事もなかったであろう労働者階級の過酷な実態を見聞する機会が持てたものと思われる。

労働者階級の健康を脅かす極貧、過酷な労働、無知に加え、公衆衛生の悪さはエンゲルスがその著作で再三指摘している。エンゲルスやマルクスが指摘したと同じように『大英帝国の子どもたち』⁶²⁾、『ヴィクトリア時代のロンドン』⁶³⁾には労働者階級の様子が如実に記述されている。『大英帝国の子どもたち』には、今日の社会を注意深く見てみますと、夜遅くまで街頭にたむろする少年・少女達の群れほど悲しいものはない。そこには深刻な危険がたくさん待ち受けており、悪い習慣が身に付き、総じて怠け、悪徳、犯罪の温床にどっぷりつかっているようなものであると述べられた。そこには「騒々しい粗暴な振る舞い、野卑な言葉遣い、罪深いとしかいいようのない行いを倣い覚えていく現実」⁶⁴⁾があり、無気力で見ても無残な母親、その名に値しない母親が現に存在すると批判し、母親達がその義務や特権を忘れてしまっているかのようなであると述べられている。また、容姿に恵まれた労働者階級の少女達にとって、売春以上に多くの報酬と自由と自立を与える職業はほとんど見当たらなかったとも述べている。これらの指摘は、いわゆるヴィクトリア朝時代の世紀末のことである。

これらの社会現象はロバート・オーウェン⁶⁵⁾やマルクスやエンゲルスが観察して以来、長く引きずっていた問題であった。オーウェンは、ニュー・ラナーク紡績工場の総支配人であり、自己の工場経営の傍ら、労働者の状態改善に努めていた。彼は1816年に働く母親の為に、自身の工場内に保育施設を設けた。そして1～6歳の子どもを収容して、ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチ⁶⁶⁾の教育精神によって幼児教育を開始した。彼は、「社会の正しい目的は、人間の肉体的・道徳的・知的な性格の改善にある」⁶⁷⁾と考えた。その性格改善は経験する苦痛を最小に、よろこびを最大にするのが最も良い方法で行うべきであった。しかし、彼の見解では社会の現在の仕組みはそうにはなっていないし、労働者たちは将来の見通しもなく、不健康で気の進まない労働に従事しながら、生活必需品のほとんどが入手できない状況にあった。そして、貪欲な資本家に貪られている労働者達は、飲酒癖や無気力、怠惰となり、結果的にその子供達に暴力を振るうか、放任にす

るなど、養育が十分にできない現実があった。特にイースト・エンドやソーホー地区には一般庶民でも足を踏み入れる事ができないようなスラム街ができていた。ナイチンゲールは、後に「現事態に置ける最大の奇跡は、健康なのかそれとも病気なのか。また生なのか死なのか。われわれのうちのある者にとっては、自分たちの無知と怠慢とが作り出している環境内で卑しくも生きていられるということ、これは毎日繰り返されている最大の奇跡である。」⁶⁸⁾と述べている。ナイチンゲールにしてみればこれらはまさに社会悪であった。イギリス社会の現実には腐敗した社会であり、その病巣は明らかであった。貧困が無知をもたらし、無知が病気をもたらす。その病気はまた貧困につながる。この悪循環はたちきらねばならない。その手当てこそが国家の重要な使命であるべきであった。まさに、自己をしれという言葉は国家にも当てはまったのである。ナイチンゲールは、貧困・無知・病気といった社会悪への手当は人間の病気同様、まさに現実的な対応が必要であった。

4) 病院の機能と職業看護師の実態

ナイチンゲールは、弱者としての女性の取扱いに加え、様々な社会悪の中でも病気の人に対する扱いが一番惨いと感じていた。人がその生を受けて終末(end)に至る迄の発達段階に於いて、その発達と発達に応じた社会生活を阻害する因子、それは病気である。当時のイギリス社会における病気の原因は多くが、貧困や無知がもたらす不潔な生活環境からであった。その為、貧困や無知から人々を解放し、社会の環境を制御する事によって、病気に打ち勝つ力を与える必要があった。

ナイチンゲールが有していた高邁な理想は、高い倫理観となって現れると同時に当時の不徳な女性達に向けられた。ナイチンゲールの様な高潔な徳を備えた女性にとって、我慢がならなかったのはまずは救貧院の女性達であった。ナイチンゲールの目には彼女達が品性の卑しい、酒に溺れた、墮落した女性達として映った。この中でも特に病院の看護をしているものにその卑しさがあった。

その病気との戦いの間、支援するのが看護師の役割であった。それには看護師たちが人々の健康を脅かす病気についてよく知り、その病気が回復するよう支援する必要があった。又、その役割を果たすのが看護師であると確信していた。しかしながら、看護師たちは無知であり、その役割が果

たせるようには教育されていなかった。1854年の夏、ロンドンにコレラが大流行した⁶⁹⁾時、多くの看護師が死亡した。特に衛生状態の悪かったソーホー地区が悲惨であった。ここには売春婦達が多く住まっていた。『ナイチンゲール伝』によればそうした女性達が恐怖と苦痛で気違いの様になり、多くの者が死亡した⁷⁰⁾と述べられている。コレラという病気が貧困層から発生するということ、その病気がもたらす死、その死を目の当たりにする人々が、恐怖から混乱状態になること、それは無知であるということだけでは片付けられない問題であった。

ナイチンゲールは1863年に『病院覚え書』⁷¹⁾を出版しているが、その著作の中で病院の衛生状況の調査を克明に記している。これによれば当時、ロンドンの病院での死亡率は90%であった。病院の役割は、人々が健康を回復するための学習の場でなくてはならないのにそうではなく、また看護をするものが一人もいないで、残酷な取扱いの中で患者が死んで行く酷い状況であった。ナイチンゲールは「病院とは患者が多くはその健康を回復し、大概の場合、健康が増進して自分の家族達の元に帰る為の学習の場であるべきであるのに、そうではなく、病院の事情に通じている者の多くが知っている事であるが、不道德と下品さを助長させる場であるといわれているのを私たちは知っている。それは評判の良くない女性が看護師として受け入れられ」⁷²⁾と述べている。地域や戦時中の病院がいかにあるべきか、そこに働く看護師たちがいかにあるべきか？ナイチンゲールがいかにこの問題の改善に積極的であったかは、彼女の生涯の仕事が指し示す。

ナイチンゲールによれば、病院とは病気の回復と健康の保持・増進の為の教育の場である。しかし、現実には不道德と下品さを助長させる場であった。正規の教育も受けないで品性の良くない看護師が、ただ金品の為だけに看護を行っている現実があった。チャールズ・ディケンズ⁷³⁾は著作『マーティン・チャズルウィット』⁷⁴⁾の中で、ギャンプ婦人という品性の卑しい大酒のみの看護師を登場させた。ギャンプ婦人は常に片手に酒のはいったカップを持ち、品のない笑い方と行儀の悪い挨拶をするなど、いかにも卑屈な態度をする人物として描かれている。作品の中のギャンプ婦人は自分を専門看護師だと自認、病室では常にジンを要求、夜間は患者をベッドに縛りつけ、“騒

ぐと舌を引っこ抜くよ”と患者を黙らせ、自身の睡眠が妨げられないようにした。当時の専門看護師と自称している看護師たちは看護師とは名ばかりで、その顔にずるがしこさ、抜け目なさが漂い、アルコール臭さをプンプンさせ、インチキ占いの様な手法が彼女の専門的な特技⁷⁵⁾であった。ディケンズはこの作品を通して、当時、存在した不道德な看護師を告発したのである。

同様にエンゲルスも「一人の精神薄弱者が看護師として雇われていて、病人に対していろんなでたらめをやっていた。又、看護師達が寝ないで宿直をする労を省く為に、夜分たびたび騒いだり、起き上がったたりする病人は病人の蒲団の上からベッドの下に綱をかけて、固く縛りつけられていた」⁷⁶⁾と述べている。精神が錯乱して暴れる患者に対して治療上、やむなく抑制をする場合は今日でもある。しかし、当時の看護師達は自分たちの手間を省くために、度々騒いだり、起き上がったたりする病人を綱で固く縛りつけ、放置していたのである。看護師がいかに卑しかったかという事の例証はブロンテの『ジェーン・エア』⁷⁷⁾にも描写されている。主人公であるジェーンが、家庭教師として働いていたロチェスター家の狂気の妻は鍵付きの部屋に監禁されていた。この妻を看護していたのが当時の専門職と自称する看護師である。雇用されていた看護師は酒を飲んで夜間に眠り込んでしまうために狂人は、たびたび鍵を取りあげて住居内を歩き回り、その果てに屋敷に放火し、自分も死んでしまう。ここでの看護師像は、“あの者たちにありがちな”という表現と、飲酒癖と夜間眠り込んでしまう看護師描写に明確である。ギャンプ婦人に代表されるような巷の看護師像は、ナイチンゲールにしてみれば社会悪そのものであった。これが他方においては貧しい女性達がその日の糧を得る為の手段であっても見逃せるものではない。彼女の高邁な価値規範から考えた場合、人格を有するに値しない女性は階層を問わなかった。その上、この事が大きな社会問題を引き起こしていた。

病院の役割が明確であるにも関わらず、専門職と自称しつつ看護と呼べるべき看護をする者が一人もいないで、残酷な取扱いの中で患者が死んで行く酷い状況、そうした社会の病巣を知ったナイチンゲールは、看護をするものがないのであれば自分が看護師になろう。その仕事はキリストの教えを実践するに相応しい仕事であると考えられ

た。しかも病院の状況を改善するには施設内の環境改善と同時に、その中で働く人、つまり、劣悪な看護師を一掃する必要もあった。ナイチンゲールの行為は自らの進路を自ら切り開き、自らその場所に飛び込んで、墮落の現象を改善する。ナイチンゲールは新しい教育システムによって、女性を教育し、新しい看護師を創造する必要を実感したであろう。

彼女には感性の鋭さがあり、知性と行動力があつた。彼女の求めた理想的な病院は、女性の持っている知性と徳性が生かされる“場”でもあつた。“神の道につながる職業”，これはわが国の仏教における“看護即観音行”的思想にもつながる。観音とは観音菩薩のことであり、阿弥陀如来の化身を意味する。つまり、観音菩薩は他者救済を意味する。仏教における真理の第一段階は物事の本質の理解であり、第二段階はその理解に沿って自身実践し、行動変容を起こすことである。第三段階が他者救済であり、実際に他者救済に向けて行動を起こす。これらの最終段階が仏の世界である。つまり、他者救済は仏に通じる道であると解釈される。ゆえに、看護という職業に邁進することこそが他者救済であり、観音行であると仏教では考えられた。それはナイチンゲールが看護を“神の道につながる職業”として考えたのと同じ思想であろう。ナイチンゲールは、「優れた看護師は優れた女性」⁷⁸⁾であると述べ、優れた女性は「その知性 (intellect)、倫理 (moral activity)、実践 (practice) において最上のものを患者に惜しみなく与える女性である。」⁷⁹⁾と述べた。実際、ナイチンゲールは1853年から1年間婦人病院の監督官として働いたのちに、クリミア戦争へ従軍したのである。

ハリエット・マーティノウ⁸⁰⁾は1851年の国勢調査で、病人に対する現実の看護師の比率についても若干の光が投げかけられたと述べ、国内で住み込み看護師として登録されている女性達が40,000人に達しようとしている。がしかし、この数は述べるのも変であるが、半分近くが5歳から20歳の子守り女も含まれていた⁸¹⁾。もし、子供たちが病気になったとしたらこれらの子守女が看護をしたのである。それは看護師とは呼べない類の者たちであった。ナイチンゲールの『看護覚え書』にもこのデータは細かく掲載されている⁸²⁾。ナイチンゲールは「病気の赤ん坊の生命を吹き消すことは、ろうそくの火を消すのと同じくらいに簡単

なこと」⁸³⁾であると述べ、赤ん坊の世話の仕方についても警告を与えた。

■ 女性の専門職を創設する

1) 看護教育の開始

ナイチンゲールは、「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」⁸⁴⁾と述べた。ナイチンゲールが見聞した社会の現象が、ナイチンゲールの心に問いを抱かせ、彼女の知性が問題解決に道筋を与えた。それが現存する看護師を一掃させて新しく女性の看護専門職者を育成することであった。イギリス社会における現象、すなわち、女性の権利問題、イギリス女子教育の実情、労働者階級の問題、健康問題、病院看護師の実態は人々の健康問題改善が急務であった。特に、クリミア戦争での経験はナイチンゲールに平時から看護師の訓練しておく必要性を感じさせていた。又、再び、戦争が起きないとはいえない。その時のためにこそ、平時から看護師を訓練しておく必要があった。組織的な学校教育によって看護師の教育が可能であると考えたナイチンゲールは、看護師学校設立に踏み切った。質の高い看護師を養成する事は彼女の最大の関心事であり、主要な目的であった。彼女の著作『女性による陸軍病院の看護』に示されたように、看護教育の目的は病院看護をより良くしていくことであり、その目的が明確であるならば、その目的は実現していかなければならなかった。その為には、労働によって自らの生活の糧を得ようとする女性達を可能な限り訓練し、組織化していくことであった。

しかし、この頃のイギリスではよい教育方法は開発されておらず、教師や医師や弁護士などの専門職は見習い制度が主流であった。最も看護師という職業が少なくとも教育という形で行われていたのは、テオドール・フリードナー牧師⁸⁵⁾がドイツのカイゼルウェルト学園で始めたのが最初であり、これは1837年の事であった。この学園での教育は単に看護師としての教育を目指していたわけではなく、キリスト教のディアコネス (Deaconess) という女性の伝道者養成が主たる目的であった。その教育の一環として看護師や女教師の養成をしていたのである。従って、看護師という職業を女性の職業として位置づけ、看護師という職業を定義付け、その理念を持って意図的に教育を開始し

たのはやはり、ナイチンゲールその人である。しかし、看護師の教育に関してその着想の基になっているのは、彼女が看護師になるまでに僅かながら学んだカイゼルスウェルト学園での教育方法であろう。しかしながら、彼女の教育は彼女自身の経験から導き出したオリジナルのものであり、看護の独自性を追及したものである。これは彼女自身が経験した女子教育の在り方、イギリス社会の環境の粗悪さ、弱者の取扱い、病院環境の粗悪さ、戦時中の傷病兵の取扱い等が焦点になっている。

病院の状況を改善するには施設内の環境改善と同時に、その中で働く人、つまり、劣悪な看護師を一掃する必要もあった。彼女には感性の鋭さがあり、知性と行動力があつた。彼女の求めた理想的な病院は、女性の持っている知性と徳性が生かされる“場”でもあった。そして、彼女は「理論というものは、実践に支えられているかぎりは大いに有用なものであるが、実践の伴わない理論は看護師に破滅をもたらす。」⁸⁶⁾と述べるほどにナイチンゲールは実践を重要視した。そして、ナイチンゲールが行った看護教育は、見習い制度である。

ナイチンゲールは「この仕事が規則と組織と管理とが十分に整えられ、そのもとで行われる限りは、いずれにせよ大きな成果が上げられるであろう。そしてここに道徳的な感化が働いている限りは神によって示された道筋を進んでいきさえすれば良いのである。」⁸⁷⁾と述べている。教育をする組織があり、その組織の機能がよく管理されるよう規則を設ければ、あとは神によって示された道筋を示せば良い。まずは規則が必要であった。規則というのはある意味、厳密で融通がきかないように考えられるが、他方、秩序を保つと同時に万人に共通・平等の精神がある。ナイチンゲールは自己の理念に合う看護師を養成する為に多くの“規則”を作った。これらの規則は『ナイチンゲール著作集』⁸⁸⁾に掲載されているが、その規則には看護師に望まれる資質も規定された。

かつてコントが女性は知的作業には極めて不適格との意見を述べたが、ナイチンゲールが見聞した社会の現象が、ナイチンゲールの心に問いを抱かせ、彼女の知性が問題解決の方向に導いたのである。“19世紀は女性の世紀”その言葉が示す通り、彼女の働きかけは真に女性の生き方の本質に迫るものがあり、その活動は常に人々の健康に関する活動であった。そしてその教育は女性に不足していると考えられた知的内在性を克服するための機

能を十分に果たし得るように構想された。

マーティノウは、現存する看護師たちは「どのように看護すべきかについてこれまで教育されなかった」⁸⁹⁾と述べ、看護師は新鮮な外気と清潔が必須である理由を学ばなければならない。そして、人体の構成とそのニーズと病気に対する管理方法について学ばなければならないと述べた。これらもナイチンゲールの提言を受けての記述であると考えられる。特に、ヴィクトリア朝中期のチャールズ・ダーウィン⁹⁰⁾等と共に代表的な科学者であるハーバート・スペンサー⁹¹⁾の思想は、恐らくナイチンゲールに影響を与えたであろう。彼の教育思想は『科学の起源』⁹²⁾、『進歩について—その法則と原因』⁹³⁾、『知識の価値—教育論第一部』⁹⁴⁾などに明確である。スペンサーは目的論的に言えば自然が健康のために有効な安全装置を与えてくれたのに、知識不足がこの安全装置の大半を無駄にしていると述べ、たくましい体力とそれに伴う元気とは、幸福の最大の要素であるから、その保ち方の教育こそ他の一切に勝る重要な教育となろう⁹⁵⁾と述べている。その上で、スペンサーは生理学の一般真理と、日常行為との関係を理解するに必要な生理学のコースこそ、合理的教育の最も基礎的な部分であると述べた。日常生活と生理学、それこそがナイチンゲールが後に看護教育で示した教育内容である。

2) 看護教育の目的

(1) 看護は人格である

医療の分野に新しい専門職を創設し、発展させるにはその独自性が主張されなければならない。人格とは自立的意志を有し、自己決定的である個人であり、それは職業も含まれる。女性を専門職業に向けて教育する事、それは単に女性にその職業的訓練を施す事のみではない。そこでナイチンゲールが実施した看護教育の目的を、彼女の手紙の内容からも検討してみる。

オックスフォード大学医学部教授、ヘンリー・ウェントワース・アクランド博士⁹⁶⁾に宛てたナイチンゲールの手紙には「看護とは単に芸術であるのみならず人格でもある (Nursing is not only an art but a character)」⁹⁷⁾と書かれている。手紙は主として看護師の国家登録問題と身分法に関してナイチンゲールの意見を伺ったアクランド博士に対する彼女の返信である。ナイチンゲールは“看護は人格である”という言葉に引き続いて、

そうした人格という問題に関してどの様にして試験などで判定する事ができるのかと反論しているのである。これは1869年頃からイギリスで起きていた看護師の国家登録制や試験制度導入問題における一連の論争で、ナイチンゲールが示した考えである。その言葉はただ単に、国家登録制や試験制度に対する反対意見として受け止めてしまえばそれだけに終わってしまうものである。が、この言葉にはナイチンゲールの看護教育に関する哲学があると筆者は考えている。

ナイチンゲールは、看護とは単に art⁹⁸⁾であるのみならずと述べている。この art⁹⁸⁾という言葉は通常“芸術”と訳されているが、同時に“技能、技術”の意味も持つ。看護の役割、即ち“患者への支援法から考えると skill”の意味合いの方が強いと筆者は考えている。しかしながら、この art⁹⁸⁾を使用した場合の技術には、さらに深い意味がある。佐々木秀美著『看護教育における思考訓練の重要性—デューイの反省的思考論を手がかりに』⁹⁸⁾によれば、art⁹⁸⁾の意味は非言語的要素を分析的思考によって患者の健康問題を探ることにつながる。つまり、それは五感で得られた情報のいくつかから、その因果関係を分析的に検証していく過程である。そこには日本人が好む気配りの世界がある。ナイチンゲールは病気というものは発病と同時に回復過程である、その回復は人間が持っている自然の回復力である、その自然の力が遺憾なく発揮できるようになるまで、明るい陽光と新鮮な空気と室内の環境を整え、体の衰弱を最小限にするように栄養を補給するといった事が彼女のいう看護であった。自然に即した形、すなわち、人々の日常生活における健康問題を適切に支援する事であった。彼女は、自然が我々に与える恩恵という事に対し深い傾倒があったので、その看護ケアの基本に“陽光”“新鮮な空気”をおいた。それは生命に不可欠な原則である。その原則は個・集団、地域特性を問わないものである。よって、人々の健康ニーズを把握することこそが、人々の生命を守ることにつながり、健康ニーズに即した支援が適切にできる。これはナイチンゲールが日常生活から導き出した原則である。看護専門職者自身が自身の職務の遂行に対して、一定の判断を下すとき、そこには看護専門職者自身が下す意志決定がある。それは看護に人格があるということを指し示すのである。

次に、この art⁹⁸⁾のみならず看護とは character⁹⁹⁾

であるという言葉の意味はさらに深い。character”とは一般的に人格と訳される。逆に日本語から人格という言葉英訳するとcharacter”とpersonality”の2語がある。personality”とはその語源であるpersona”の意味する仮面や殻から考えても、“善と悪”“裏と表”“内と外”といったような人格の二重構造的状態全てを包括するものである。しかし、character”とは倫理的、道徳的主体者としての個人としての意味合いが強い。つまり、ナイチンゲールが、看護を定義づける際にcharacter”という文言を使ったということに大きな意味がある。それはこの職業における倫理的・道徳的側面を強調したかったのではないかと考えられるのである。つまり、看護の独自性である。

わが国の“教育基本法”における教育の目的は“人格の完成”である。完成された人物、この究極の“理想的人物像”が神である。その神に近い理想的な人間に近づく事が“人格の完成”であると解釈される。『広辞苑』によれば人格とは道徳行為の主体としての個人、自立的意思を有し、自己決定的である個人となっている。『広辞苑』には同時に哲学者イマヌエル・カント⁹⁹⁾の人格に対する考え方を示している。それによれば人格とは道徳の立法者としての人格、単に他の者の手段となる事なく、自己自身を目的とする自律的な自由な主体としての人格に比例のない尊厳性があるとしている。看護実践が患者の尊厳を含めた問題として捉えるならば、人格という言葉には職業的倫理も含まれる。

当時の女性達が人格として扱われていたかどうかという事は、彼女達が人生に対する決定権を持たなかったという点からも推測する事ができる。ナイチンゲールは自己の経験からも女性達が自身の人生における自己決定のできる主体的な人間として、あるいは看護実践時の意思決定的な判断も看護専門職者としてできるといった二重の意味で看護を人格であると考えたのであろう。彼女の教育目的はキリスト教という高い次元での思想と現実社会で、人が生きるという問題に対応したものであり、今日の看護教育の課題から考えても一つの示唆を与えるものである。

(2) 健康維持に不可欠な原則と病院の機能

ナイチンゲールが最も精力を傾け、そして実りをもたらしたのは、公衆衛生の普及と人々の健康教育にあった。小さい時から病気の人に対する関

心とそれを助けたいという強い熱望を持っていたナイチンゲールは、様々な社会悪の中でも病気の人に対する扱いが一番惨いと感じていた。人がその生を受けて終末(end)に至るまでの発達段階において、その発達と発達に応じた社会生活を阻害する因子、それは病気である。その病気の原因は細菌やウィルスというミクロの世界の生物という事もあるが、その微生物を繁殖させるのは不潔であり、不潔な社会環境を作り出すのは人間である。人間が作り出す不潔な環境を無知の成せる技であり、それは無学が原因であると考えられた。人が無学であるという事は多くの場合、貧困がもたらすものである。つまり、貧困が無知を、無知が病気を作り出しているのである。その為、貧困や無知から人々を解放し、人々が身体内外の環境を制御・コントロールすることによって疾病を予防する。既に病気状態にある人に対しては適切に支援し、回復に向けたケアと指導を為し、再び、健康を取り戻し、社会でその活動が再開できるようにする必要があった。しかしながら、当時の社会状況の中でこの事に関する限り、誰も手を付けようとはしなかった。

ナイチンゲールは、当時の病院の状況を『病院覚え書』の中で述べている。彼女は独自の統計学的な調査を行い、建物そのものの立地条件が健全であるかどうか、建物の通気性や陽光が人間の生活に必要な基準を満たしているかどうかといった事などを、入念な調査結果から報告している。人の住まう環境が健全である事、人の飲み水が清浄である事、それは人間の健康を保持する為の必須条件であった。しかしながら、彼女が調べた調査結果は余りにもお粗末なものであった。当時の病院は暖房もなく、窓は締め切られ、壁は滴が垂れ、カビや細菌が繁殖し、更に排水や便所、流し等が整備されておらず、下水が逆流してその発散物が病室へ流れ込んでいた。その上、病人は看病するものもなく放置されていた。彼女は、病院とは患者がその健康を回復し、健康が増進して社会復帰をする為の学習の場であるべきであると述べている。しかし、現実にはそうではなく病院の機能が果たせないで多くの患者が死亡していた¹⁰⁰⁾。その原因の一つに品性の良くない看護師達の存在があった。この看護師達は病院としての機能も理解しないで逆の役割を果たしているように彼女には考えられたのであろう。ナイチンゲールは教育も受けていない品性の良くない看護師がただ金品の

為だけに看護を行っており、過酷な取扱いの中で患者が死んでいく酷い状態であると述べている。彼女は病院の建物の構造そのものの欠陥を含め、人的環境も最悪であり、悪の温床になっているのが許せなかったのであろう。彼女が指摘したように、当時の病院のあり方には酷いものがあった。

その上、クリミア戦争での従軍看護師としての活動は新たな発見に繋がった。兵舎病院の粗悪さである。スクタリの病院は下水も完備しておらず、密閉した部屋に多くの兵士が収容され、患者達の空気は汚染されていた。ナイチンゲールの証言によれば一つ屋根の下にまだかつてないくらい多数の患者を、一時に詰め込んだ病院における死亡率は凄まじかった。それはスクタリの病院の事である。この余りにも有名な例はある時期、2500人もの傷病者を収容していたその病院で5人のうち2人は亡くなっているというものである。一方のクリミアのテント病院では整った建物もなく毛布もなく、食物や薬品も不足していたが、病人の死亡率は約半分であった。が、それらのテント一つ一つには数人の患者しか収容していなかったのである。病人の一部を仮収容していたバラクラバの病院でさえ、この様に高い死亡率は出していない。バラクラバより高い高地にあって海からの微風を受けているキャッスル病院の換気のよい独立家屋の仮兵舎では、その当然の結果として傷病者の死亡率は3%にも満たなかった¹⁰¹⁾。この現象は何を意味するのか？ナイチンゲールの問いは一つ屋根の下に多数の病人が集まるとなせ、惨事が起きるのか？の問いであった。ナイチンゲールの見解によれば、病人の密集は病人への注意が滞り、結果、間違った扱いをすることにつながり、その結果不測の事故がおきることであった。次に過密状態は換気の不足、不潔、衛生上の欠陥をもたらし、管理上の失態を生じやすいことであった。

労働者階級でも特に極貧の人達を収容していたのが救貧院であった。この救貧院はスクタリ再現といった感があり、ありとあらゆる悪がはびこっている場所であった。貧乏人や精神病患者、伝染病患者がメチャクチャに収容されていた。彼らの看護はたまたま、一番元気の良いものがあっており、粗悪であった。この様に社会環境の悪さといった病院環境の粗悪などが指摘されながら、この問題に手を付ける者がいなかったのである。

エンゲルスは、1845年に出版した『イギリスにおける労働者階級の実態』の中で次の様に記述し

ている。「病院ばかりでなく一般の住環境でさえ、小屋は小さくて、不潔であり、最も小さい種類のものである。街路は平らでなく、でこぼこで、一部は舗装されていないし、廃水口もない。おびただしい汚物、廃物、胸のむかつくような糞便が、澱んだ水溜まりの至るところに散在している。あたりの空気は、これらの発散するガスによって汚染され、一ダースもの工場の煙突から出る煤煙によって曇らされ、重苦しくされている。たくさんのボロを着た子供や女が、まるでゴミの山や水たまりの中でいい気になっている豚と同じように汚らしく、このあたりをうろついている。簡単にいえばこの巢窟全体が、アーク河に沿った最悪の囲い地でもなかなか及ばないほど不快で、嫌悪すべき光景を呈しているのである。この荒れ果てた小屋の中に住み、こわれた防水布を張り付けた窓や、割れ目のはいったドアや、腐れ落ちかかった入り口の柱の後に、あるいは更に暗くてじめじめした地下室の中に、この故意とも見えるような閉じ込められた空気の中のこの限りない不潔と悪臭の間に、生きている種族、この種族こそ実際に、人類の最も低い段階にあるものに違いない。」¹⁰²⁾

そして、エンゲルスは「どちらを向いてもいたるところに我々は永続的あるいは一時的な貧困をこうした状態あるいは労働から派生する病気を、墮落を見出だす。至るところに肉体と精神の両面に渡る人間性の破壊を、緩やかではあるが確実な人間性の喪失を見いだす。」¹⁰³⁾と述べている。マルクスも同様に『資本論』の中で工場労働者の状況と工場環境の悪さを指摘している。この様に当時の多くの労働者が最悪の生活環境の中で、長時間に及ぶ労働にも関わらず賃金は低く、貧困の中で栄養失調となって、生命は蝕まれ、子供達は饑餓状態で放置された。また、ナイチンゲールが「すし詰め工場や学校」¹⁰⁴⁾と記述している様に、おおよそ、一般大衆が集まるような場所は公衆衛生が悪く、人々の健康に重大な障害を与えていた。「新鮮な空気」の不足がいかに身体の健全性を阻害するか。ナイチンゲールは、工場や作業所で働く人々の健康問題に対して何の配慮もされておらず、貧しい労働者たちは過密状態で無理な姿勢、運動不足、短い食事時間と栄養不足、長時間に及ぶ過酷な労働と不潔な空気といった中で、安い賃金と引きかえに「労働と健康と、そして生命を提供しなければならない。」¹⁰⁵⁾と述べた。こうした工場内の環境下では胸部疾患や肺結核が蔓延

し、若者の生命が奪われた。劣悪な環境下で伝染病等が流行しようものならひとたまりもなかった。

伝染病の予防には、生活環境を衛生的にし、できる限り感染源をなくすことである。二つ目は伝染ルートを遮断する事にある。三つ目は患者の体力を高め、免疫力を付けることにある。この人間の防衛システムは身体内における最大の自己保存のためのシステムである。病原菌が発見されていなかったこの時代、彼女はまさにクリミアの経験から一人一人が広い空間で生活すれば伝染病が拡がらないこと、その為には個室隔離が必要であること、あるいは病院と病院が離れて建てられるべきであることを発見した。その上、空気の汚染が人の健康を確かに阻害し、新鮮な空気が病気の回復に不可欠であると確証した。彼女の鋭い観察力は新鮮な空気と陽光が、患者に新しい生命を与える事を経験したのである。クリミア戦争での経験のみならずイギリス社会の多くの地域の空気は汚れていた。働く場所、病院、家屋は密閉され、新鮮な空気が入らず空気は澁み、光は人々から遮断されており、健康的な生活というには余りにもお粗末であった。

更に、個人に対して健康教育をする必要性を痛感した。社会という広い地域の環境の整備と保全、家庭という狭い範囲での環境の整備と保全である。ナイチンゲールの著作『看護覚え書』の全編に示されているのは自身が述べたようにイギリスの女性達に示された日常生活における健康保持のためのヒントを与えようとしたものである。具体的には飲み水や下水の完備、陽光や新鮮な空気が人々にいかに必要であるかの認識を国民に与えることであった。人が生を受けた直後から養育にあたるのはその子の母親である。母親である女性達が無知であっては子どもの健全育成は望めない。その為、母親たちは子供を健全に育てる為の清潔な衣服や住居・身体の清潔や栄養に関する知識を有する必要性があった。又、患者達に健康教育をすることによって多くの患者を疾病から守ることになる。その為の人材が必要であった。そこで彼女は女性達に健康教育に必要な知識を教授し、人間の生活にとって新鮮な空気や適当な照明、陽光、栄養がいかに大事であるか認識させようと試みたのである。

これらの人々を困難から救済するためにナイチンゲールは女性に教育を施し、職業として人々の健康問題に関わらせることによって、二重の意味

で弱者救済ができる。この試みは社会悪への治療であり、一石二鳥であった。

3) 良好な教育環境と教育者の確保

1860年、ナイチンゲールは聖トマス病院に看護師学校を設立し、看護教育を開始した。その教育が円滑に行われるには教育するに相応しい教育的環境を提供する必要がある。ナイチンゲールは、看護師の教育には立派に組織された病院と、その教育を受ける女性達が安心して住める住居が必要であると考えていた。病院は教育を受ける学生が看護法を学びえる唯一の教育環境であり、寄宿舎は女性達が人格を形成する場として必要なものである。その環境が良好であるべきはあらためていうまでもない。イギリスで看護師の教育を行っているところは皆無であったから、ナイチンゲールは既存の病院を看護教育の場にする事とした。これに選ばれたのが先述した聖トマス病院である。彼女の認識によれば、ロンドン中の全ての病院が欠陥だらけであった。その中で、聖トマス病院は当時としてはかなり、優れた施設であった。

しかし、ナイチンゲールが、特にこの病院を選択した理由は他にもあった。それはまず、この病院に移転の話が持ち上がっていたことである。『病院覚え書』にも示されたように病院の構造の原則は人の健康を害する事のない衛生的な病院である。そのことが配慮された病院の建築はぜひとも必要であった。ナイチンゲールによれば、パビリオン方式と呼ばれる建造物は一つ一つが独立しており、病院としては主体となるどの部分も空気の流通がないパビリオン方式の建築法が好ましいのであった¹⁰⁶⁾。病院が病気の人を入院させて回復に向けて働きかける場であるとしたら、そこには感染症の者も入院させる可能性があるということになる。その場合、パビリオン方式で建築されていたら、院内感染を防ぐことができる。つまり、空気による感染経路を遮断することができるとナイチンゲールは考えたのであろう。そして、病院の内部構造についてナイチンゲールには、床や壁の素材、ベッド間隔、給水や排水他、事細かい理想が限りなくあった。聖トマス病院の新築計画には彼女の病院建築構想が反映させられる可能性があったのである。

良質な教育環境には人的環境も含まれる。看護専門職者の教育には良質の教育者が必要である。また、その教育者はその専門性に相応しい教育の

できる人でなければならない。つまり、看護教育には健康に関する専門的な教育、つまり病気に関して基礎知識を授けてくれる人と看護法を教育する人が必要であった。聖トマス病院には看護教育に協力を約束してくれたホイットフィールド博士¹⁰⁷⁾が勤務していた。ホイットフィールド博士は病院の改革を主張し、移転問題でナイチンゲールの協力を取り付け、成功させた人物である。聖トマス病院の医師たちの多くが看護教育に反対した中で、彼はナイチンゲールに協力を表明した。また、聖トマス病院のレジデントであり、ホイットフィールド博士の助手であったジョン・クロフト医師¹⁰⁸⁾も又、ナイチンゲールの構想した教育の協力者であった。彼らはナイチンゲールが構想した看護の基礎教育で医学的知識を教授する役割を担った。

その次に看護師を教育する優秀な看護総監督が必要であった。ナイチンゲールは、予めから考えていた看護師養成所の設立に関する計画が具体的になった1859年から、友人のエリザベス・ブラックウェル¹⁰⁹⁾に看護師養成所の管理者になってくれるよう依頼していた。ブラックウェルはニューヨークの病院で働いていたが、1859年に医学研修の為にイギリスに戻っており、“女性の権利”運動家達と一緒に女性の解放運動を行っていた。

ブラックウェルはイギリス出身であり、1849年にアメリカで医学博士の免許を取得した女性である。しかし、彼女がイギリス初の女性医師として登録できたのは1859年のことである。ブラックウェルは、アメリカで医師免許を取得したのち、1850年にナイチンゲール家を訪問したことがあった。この頃、ブラックウェルは働く場所が確保できず、パリの病院で医学研修中であった。クックの『ナイチンゲールその生涯と思想』には、ブラックウェルがナイチンゲールに、パリである女性が外科医学を学ぶために男装を思いついたという話をし、「ズボンははけば、学問に対する真摯な意志を持っているとみなされて何とか受け入れてもらえるでしょうが、ペティコートは常に浮気心の象徴とみなされているようです。」¹¹⁰⁾と語ったことが記述されている。イギリスで女医達は“三流の男性”と同じように評価されていた。ちなみに、わが国の女医第一号は荻野ぎん子¹¹¹⁾であり、ブラックウェルがアメリカで医師免許を取得した年より、35年も後の1884年(明治17年)のことである。

しかし、ナイチンゲールの看護総監督就任依頼

に対してブラックウェルは、「自分自身の個人的な目的と両立できる仕事ではないので、ナイチンゲール嬢と一緒に働く事はできない。」¹¹²⁾と彼女の協力依頼を断ってきた。ナイチンゲールとブラックウェルは、医療の分野という意味では同じであったが、ブラックウェルの主張は医学の分野における女性の解放であり、ナイチンゲールが考えていた看護の分野ではなかった。つまり、ナイチンゲールは、ブラックウェルを看護教育に勧誘する事に失敗したのである。特に、ナイチンゲールに協力をすると約束した聖トマス病院のホイットフィールド博士が「あなたが思っているような仕事をすべてできるようなイギリス女性を私は一度もお目にかかったことはありません。」¹¹³⁾と暗にブラックウェルの才能を否定したことである。この事でナイチンゲールは相当にショックを受け、女性に対する偏見や蔑視の感情が更に深まった。彼女は、「女性達は自分の方向や、競争と言うよりも他の人との知恵比べや、取り分け時間を見つけられるような男性の専門職業へ入って行く事を切望しています。」¹¹⁴⁾と述べ、女性達が知性を持っていながら、その知性を自慢し、競争するかの様に男性に開かれている職業につきたがる傾向について述べ、女性達が医師になるのであれば、彼女達こそ問題の多い医学界を改革するべきであると考えた。ブラックウェル達の主張する“男女同権”運動が、女性が評価の悪い男性達と同じ事をするのであれば、その主張は無意味であるとナイチンゲールは考えた。この時期、ブラックウェルや多くの女性著作家達が女性の働ける場が少ないと叫んでいたのである。両者共に“女性の解放”という意味では同じであったが、基本的には医療の世界に看護師という職業の分野を開拓し、その職業を専門職として高め、人々の健康に寄与させようとする試みとは違っていた。ナイチンゲールの輝かしい業績は多くの協力者に恵まれた結果であるが、彼女の生涯で知る限り女性の協力者は少なかった。そして女性に教育を施して看護師の質と地位を高めようとした彼女の企画に協力する最高の女性を見つけられなかったのである。

ナイチンゲールは元来、理想の高い女性である。看護教育そのものが自己の高い価値規範の中で、ある一定の理想的な女性像を描き、その理想に女性を近づけさせようと試みた。ナイチンゲールは現実に知識と行動が伴わない女性達に偏見と蔑視の感情を抱いていたであろう。その中でブ

ラックウェルは同じ女性でも尊敬に値する女性であった。その女性に協力を断られたことはかなりの失望であったことが推測される。ナイチンゲールが構想した看護教育システムは、医学とは違う分野で、その新しい職務の責任を担うに相応しい管理者と教育者が必要であった。

ブラックウェルに失望し、適任者不足の限られた条件の中で、聖トマス病院の看護総監督サラ・エリザベス・ウォード・ローパー夫人¹¹⁵⁾は適任であるとナイチンゲールは判断した。クックの『ナイチンゲールその生涯と思想』には、ローパー夫人のことを熟慮型ではなく、直感型の女性であるが組織力と管理能力、勇気と潔癖さは特筆するものがあり、その上決断力に優れており、彼女の考えていること、口に出す言葉、行動の間に矛盾が感じられず、いつも首尾一貫している女性であると紹介している。ナイチンゲールは「事の出発にあたっては考える限り最良の道とはいえませんが、実現可能な範囲内では最高だと思います。」¹¹⁶⁾と述べている。聖トマス病院関係者全員が看護師学校の設立に賛成であったわけでもなかった。充分ではなかったが少なくとも、当時の病院の中で最も看護教育に必要な機能を聖トマス病院は持っていたのである。多くの医師達が反対した中でわずかな協力者を支えにこの計画は強引に推進されたのである。

4) ナイチンゲール看護学校の支援者達

教育とはある一定の環境の中で、人が意図的に行っていくものである。先述したように教育環境を人的にも整えつつあったナイチンゲールの教育構想を組織的に運用していく必要があった。いかに高尚な理念があっても、教育の実現には教育の場所の確保と教育者の確保が必要である。そのために一番に確保し、恒久的に安定させておかねばならないのが財政問題である。そこで彼女に力を貸してくれたのがイギリス国民であった。

クリミア戦争中の献身的な看護活動、この活動に与えられた栄誉、その栄誉が看護教育開始への礎になった。彼女には死んだ兵士の家族や階層を問わない多くの善意の諸氏から多額の寄付金が寄せられていた。このお金は“ナイチンゲール基金”と命名され、彼女の意思でいかようにも使って良いことになっていた。当時、病弱者としてベッドに伏せていることが多かったナイチンゲールは、イギリス国民の善意のお金を一時、国民に返却す

べきであると考えたが、このお金を看護師学校設立資金にする事を考えたのである。税金のシステム同様、国民から集まったお金は国民に還元されるべきである。その最も良い方法は彼女自身も熱望してやまなかった事であり、国民も熱望して止まない看護師の教育に、その資金を当てる事が最も相応しいと考えられた。

ナイチンゲール基金運用の為に、ナイチンゲール基金委員会が設置され、看護教育のあらゆる面で最も権威のある財政的支援母体が形成された。この委員会の会長は国会議員のハリー・ヴァーネイ卿¹¹⁷⁾であった。このヴァーネイ卿はナイチンゲールの姉であるパースィノープと結婚した人物である。又、同基金の事務長としてナイチンゲールに協力したのが詩人のアーサー・ヒュー・クラフ¹¹⁸⁾である。クラフはラグビー校の改革をした高名なトマス・アーノルド¹¹⁹⁾の傑出した弟子であった。クラフはロンドンのユニバーシティ・ホールの校長を務めたが、1854年にナイチンゲールの従姉妹のブランチ¹²⁰⁾と結婚、その後、ナイチンゲールに傾倒し、彼女の仕事に大きく貢献した。トマス・ヒューズ¹²¹⁾は『トム・ブラウンの学校生活』¹²²⁾を出版したが、著作に描写された主人公のトム・ブラウンはヒューズ自身であり、アーサー少年はクラフがモデルであると言われている。著作に登場するアーサー少年は内気で、純粹で宗教心に富んだ優しい少年である。トム・ブラウンの学校生活にアーサー少年が加わることによって、様々な問題を醸していた子どもたちが理性的になり、学校に秩序と平静が訪れる。実在のクラフは、ヒューズと同時期にラグビー校に在籍した学生であった。

ナイチンゲールとクラフの精神的なつながりについては『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりを手がかりに—その1・2・3—』¹²³⁾で報告した。クラフは、ナイチンゲールの仕事に共感して彼女の仕事を手伝ったが、元来、善良で内省的であると同時に病弱であり、1861年に死去した。詩人としてのクラフを高く評価していたヒューズが、同本を出版したのは1862年の事であるから、クラフの死後ということになる。クラフの死後、ナイチンゲール基金委員会の事務長としてヘンリー・ボナナム・カーター¹²⁴⁾がその地位に就き、看護教育に大きく貢献した。彼はナイチンゲールの母方の従兄弟に当たる。法廷弁護士としての資

格とその卓越した先見の明は、その組織作りに大いに発揮された。

しかし、忘れてならないのはこの基金の大いなる援助者は、労働者階級から上流階級に至る多くの有志の国民であったことである。1860年6月25日のデイリー・ニュースには『ナイチンゲール基金』¹²⁵⁾ という記事が掲載された。そこには「1つの結果として、我々は現在、ナイチンゲール基金の手段によって、病院看護師の訓練が開始される方法を知らされた。ナイチンゲール基金委員会は看護部に対して聖トマス病院における見習い生が看護師訓練に必要な諸条件を整備し¹²⁶⁾、入学資格とともに提示した。イギリス陸軍省の改革をナイチンゲールとの共同戦線で行ったマーティノウもまた、彼女の教育に広報的な立場から協力をした。後は、設立された看護師学校に教育を受けにくる女性達が多く入ってくることが期待された。

5) 理想的な看護師を作りたい夢の実現と絶望

彫刻家が自分の描いた様に彫刻をする時、その彫刻をする素材に関して厳密にチェックし、選択していくことはその分野に関心の深い人であれば誰でも良く承知していよう。一つの職業教育においてもそれは同様である。看護教育で、良質の看護師を生み出そうとしたら、それに相応しい厳選された良質の素材が必要である。その為、ナイチンゲールは看護師の適性には至って慎重であった。彼女の教育の目的は、女性達に教育を施して看護の質的向上を図ることであったから、教育の対象は全ての階層の女性達であった。これは彼女が“労働によって自らの生活の糧を得ている層の厚い階層の女性達を可能な限り訓練する”と述べている事や、“看護師規則”には特に看護師の出身階層を規定していないこと、又、後に起きた看護師の登録問題での論争から明らかである。まず、教育の対象は「一部の上流階級の婦人たちで、報酬も求めず、しかも厳格な上司のもとでまったく同一の義務を果たすという厳しい体制に基づいて、この仕事に付く事が相応しいと考えている婦人たち」¹²⁷⁾ であり、ナイチンゲールは先に触れた2つの階層の女性達と協働させるという方法によって実現する事を提案した。

先に触れた2つの階層の女性達とはつまり、上流階級であれ、中産階級であれ、労働者であれ、自活を余儀無くされている女性達であり、自分自身で生活の糧を得なければならない女性達のこと

である。上流階級の婦人達はいわゆる淑女達であり、働かなくても生活できる女性達である。彼女達は博愛主義運動の中で慈善活動として病院の中で、奉仕活動をする意志を有する特定の婦人達である。3つ目の階層の女性達とは看護活動に情熱を注ぎ、その職業の有用性を理解し、高めようとする女性達のことであり、専門職としてあるいは天職としてその職業を全うしようとする女性達の事である。この女性達とは恐らく修道女達のことであろう。ナイチンゲールは、これらの女性達が協働することによって感化しあい、お互いの持っている利点を影響させあうことを考えた。

マーティノウは看護師の訓練について「我々の良い看護師は、これからは労働者階級で30歳位の独身女性である。彼女達は健康でしっかりしていて、仕事に好意的で、落ちついていて、思いやりのある態度で、そして我々が情熱と呼ぶような、燃えるような輝きに満ちている女性達であろう。」¹²⁸⁾ と述べ、「彼女達は人間の形態・構造について、主要な臓器がどこにあり、その作用は何かについて総合的に学ぶであろう。そして人々の健康に影響を与える食物、衣類、清潔、運動と換気について学び、さまざまな事例にあった包帯方法を学ぶであろう。ヒルと他の応用を管理する方法や、病人食の準備や方法について学ぶであろう。そして、医師が到着するまでに実施しておくべき止血法、失神や痙攣時の対応方法、炎症や激しい発作などに関する応急処置の方法について学ぶであろう。」¹²⁹⁾ と書いている。さらに1860年6月30日のワンズ・ウィークには『看護師を訓練すること』というテーマで論評をした¹³⁰⁾。そこには聖トマス病院が訓練学校であること¹³¹⁾、志願者はマトロンに申し込まなければならないこと、希望のあるものはサウスワークにある聖トマス病院のウォードローパー夫人の所に行き、志願表に必要な事項を書き込んで申し込みをすることなどについて説明がなされた。申込書には申込者の名前、年齢、出身地、教育を受けた場所、以前の職業、結婚しているか独身か、または未亡人か（結婚している場合、証明書を提出しなければならない）、既婚者または未亡人ならば子どもがいるかどうか、子どもがいる場合にはその人数、そして紹介者¹³²⁾ の8つの質問に答えるようになっている。“ナイチンゲール基金による見習い看護師の訓練に関する規則”によれば、入学資格は年齢25から35歳までである。

『家族・性・結婚の歴史』¹³³⁾ によれば、当時の

ヨーロッパにおける結婚平均年齢は25歳までであり、わが国とあまり変わらない。入学資格の年齢から考えると、看護師の訓練を受けるべき女性達は、結婚をしないと決めている女性、あるいは結婚ができない女性、寡婦達等が対象だったのである。それはやはり、一人で生きていく必要があると認められた女性に限られていたようだ。入学願書には年齢の証明書と性格についての推薦状が必要になっている。更に、不品行があったり、職務を遂行する能力がなかったり、怠惰であると判断されたときには退学が命ぜられることになっている。つまるところ、彼女の教育では階層の問題より、個人の資質が良質である事が望まれた。ナイチンゲールがいかに看護師の適性に関して慎重であったか理解できよう。『看護覚え書』に書かれているような“酔いどれギャング婦人”の一掃が彼女の狙いであったから、飲酒に関しては事のほか厳格であった。見習い生達は採用の時点から訓練の過程において慎重に査定され、必要があったらその時点で退学が勧告された。“ナイチンゲール基金による見習い看護師の職務”の中で彼女達に求められた資質は真面目、正直、誠実、信頼性、時間厳守、平静さと従順さ、清潔と端正である。つまり、このガイダンスは契約の時に渡されているから、見習い生達はこれらを了解した上で入学するということになる。見習い生として採用された者たちは入学の時期、その教育過程において頻々と評価されるよう計画された。

しかし、ナイチンゲールが期待し、望んだほど充分には看護師の志願者はなかった。マーティノウは1865年に、コーンヒル誌に『看護師求む』¹³⁴⁾、デイリー・ニュースに『女性の仕事と看護』¹³⁵⁾、有名な学問 (Popular Literature) 雑誌であるチェンバーズジャーナル、サイエンス & アーツに『イングランドにおける看護専門職』¹³⁶⁾ 等を寄稿し、ナイチンゲールの看護教育に志願者が増えるよう協力をした。それでも志願者は少なかった。ナイチンゲールは「英国の婦人達よ、なぜ、あなた方はためらっているのか。どうしてこんなに少しの婦人しかいないのか。聞くところによれば、手の空いたそして心の満たされていない婦人が大勢どこよりも英国に一番多くいるそうである。婦人の仕事、婦人の使命を求める声は英国中に響き渡っている。なぜ仕事をするものがこんなに少ないのか。私たちは自らの血を祖国に捧げる人々の事を良く聞いたものである。一体いつ頃から人々はイ

ンクしか差し出さなくなったのであろうか。』¹³⁷⁾と残念がった。当時、女性著作達は働く場所が少ないと女性の雇用を求める運動を行っていた。そのため、ナイチンゲールは看護師という仕事を医療の中で開拓することが、女性達を有用にすることにつながると考えたが、期待通りにはいかなかったのである。

1860年のこの時期と1867年の時期に、ナイチンゲールは経済学者であるミルと“女性の権利”問題で論争を起こした。少なくとも、ナイチンゲールの“女性の権利”問題での主張は、女性に法的な権利を与える前に女性に教育を施し、倫理的な行動がとれるようにすることであった。彼女がたびたび主張したように、当時の上流社会の女性達は、知識は有していたが行動はともなっていなかった。彼女にしてみればそれは人格の欠落であったろう。行動が伴って始めて知性が輝く。自己の行動に責任が持てる女性のみが権利を有するのであった。行動の伴わない上流社会の女性達に加え、下層社会の女性達はその教育が充分でない為に、実践はするがしかし道徳的な行動はできなかった。従って、参政権であれ、なんであれ、権利と名付くものの執行に当たっては、その権利を有するに相応しい人間としての社会的責任の取り方があり、それは男女を問わないものであった。

ナイチンゲールは女性問題に真剣に取り組むすぎたためか少々感情的になり、女性蔑視に陥ったようだ。女性に法的な権利を与える前に女性を道徳的にすることはぜひとも必要であり、そのために教育が必要であった。それなのに、ナイチンゲールの教育に賛同し、その教育を受ける女性は少なかったのである。他方、男性たちは違った。『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりを手がかりに— Some consideration concerning Nightingale's view of religion—Is to the clue relations with friend Arthur Hugh Clough—』¹³⁸⁾でも報告したように、ナイチンゲールと同じような宗教観を有し、ナイチンゲールに共感を寄せて自身の詩人としての能力を振り捨てて傍らで雑務を引き受けたクラフ、彼女に共感を寄せ自分の人生と処世の方針を変える行動を取った医務局長のトマス・アレクサンダー¹³⁹⁾、ナイチンゲールの哲学的思想に共鳴し、彼女に多くの助言を与えたギリシャ語教授ベンジャミン・ジョウエット¹⁴⁰⁾などは常にナイチンゲールの側にいて協力を惜しまなかった。

もちろん、ここには陸軍の改革で前線に立ったシドニー・ハーバート¹⁴¹⁾も入っていた。ナイチンゲールは、ある政治家はもう中年を過ぎようとする中で、私に共感を寄せて、自分の人生と処世の方針をすっかり変えた¹⁴²⁾と述べながら、自分の人生を完全に変えてしまった男性達が真の共感であると考えた。

人の腐敗した部分、即ち、人間の病巣と同じように社会に住み着く病巣、こうした社会悪に対する適確な治療が社会改革である。イギリス女性で教育のある婦人は働く場所を探し求めている。これは女性解放運動家達を中心にした主張であり、全体的な主張ではなかったとナイチンゲールは後で気づいた。筆者らの『モル夫人への手紙』に見るナイチンゲールの女性観¹⁴³⁾でも報告したように、ナイチンゲールは、彼女の取り組みに無理解な女性達に絶望した。クリミアでの女性達の争い、陸軍の改革における批判、女性の権利運動や参政権問題での論争、看護教育やその他の一連の改革に対する協力不在といった現実を突き付けられたとき、彼女の中に女性不信が芽生え、女性達に対して次第に絶望感を抱くようになった。ナイチンゲールは、陸軍の改革中の1858年、マーティノウに宛てた手紙に「女性のインク壺 female ink bottles」¹⁴⁴⁾と書いたが、1861年にメアリー・クラーク・モル¹⁴⁵⁾に宛てた手紙に「理論は女性の間には定着できない所にある。」¹⁴⁶⁾と書き、女性達に怒りや絶望感を示した。しかし、ナイチンゲールによって看護という職業が生み出され、女性達は実質的に社会に解放されたのである。“19世紀は女性の世紀”という言葉が伝説ではなく、真実味を帯びたのはナイチンゲールによってである。

■ 総 括

本論では主としてナイチンゲールが実践したイギリス社会の改革の中でも特に、女性問題の改革に焦点を当てた。フランスの市民革命以降の旗印である“自由と平等”、この人間に与えられた“基本的人権”が女性にのみ適用されなかったことが、婦人問題における大きなポイントとなっている。それは女性一個人が好むと好まざるに関わらずその生涯が規定されていることにあった。ナイチンゲールは自己の経験から“神の下での平等”を適用し、女性の自立を考えた。個人に与えられる基本的人権は、その名の通り、個人にあらゆる権利

を与えるものである。女性が権利を有するということは、人として社会的責任が取れる女性でなければならなかった。ナイチンゲールは女性達に看護という職業を教育的手段によって創設し、その職務遂行にあたってはその責任の重要性を自覚させ、職業的に自立することによってその活動を通してながら人格の完成を目指したのであろう。彼女は“隣人愛”に基づく人道主義的思想は女性のみならず、弱者であった労働者階級や病人にも注がれた。当時の資本主義社会の弊害の中で、健康に対する認識が著しく低い事に気づくと共に、人間に対する扱いの中でその精神に対しての扱いが低い事に気づいたのである。

質の高い教育が行われるには幾つかの要素がある。今日、良質の医療を提供するに相応しい専門職としての教育はいかにあるべきかという看護教育への問いは、いつの時代にも存在する。その時代の問いに答えようと努力した時、始めてその時代のニーズに応えうるとも言えよう。明治期初期に導入されたナイチンゲール方式による看護教育、その後の看護教育の発展に関する歴史的検証は『歴史に見るわが国の看護教育—その光と影』¹⁴⁷⁾で明らかにされている点である。それはわが国独特の文化的・政治的・経済的背景の中で進化・発展したものである。ナイチンゲールが偉大であれば偉大であるほど、その考えは看護師達の教育には大きな影響力を示したであろう事は述べるまでもない。そうした歴史が証明するように、その思想はあらゆる所に浸透していった。

わが国の看護師養成機関の教育課程は高等教育機関であれ、専門学校であれ、“保健師助産師看護師学校養成所指定規則”に準拠する。しかし、どういう人物の育成が求められているのかは明確にはなっていない。“保健師助産師看護師法”では第1条に保健師、助産師及び看護師の資質を向上し、もつて医療及び公衆衛生の普及向上を図ることを目的とすると規定されているから、良質の看護専門職者育成ということでは、保健師助産師看護師学校養成所指定規則もこれに準拠するであろう。その上、これらの規程はその基になっている、つまり、国民の健康に関する憲法あるいは医療法に立ち返って考えてみなければならない。さらにその法律があるべき理想に沿って立法されていることに立ち返るとしたら、その教育では自ずと成すべき姿が見えてくるのであろう。ゆえに、各教育機関は自教育機関の特色をその理念に求め

つつ、看護の理想を追求する。それは人格の完成であり、ナイチンゲールが生涯をかけて女性達に具有させようとした資質なのである。看護教育を組織的に始めたナイチンゲールの教育目的はこれまで検証してきたように社会悪の改善、つまり、人々の健康に関する問題への改善である。

女性の専門職を創設すること、それは、病院看護の質の向上、国民や兵士の体力向上を目指したものであり、公衆衛生の普及のための健康教育を実践することであった。そのことを女性達が実践

すれば、それはイギリス社会に貢献したことになり、イギリス国民に女性の有用性を認識させ、位置づけを高めることにつながる。よって、ナイチンゲールの教育目的は“人権思想”に基づいた女性の人格と国民の健康を主眼としたものである。彼女の教育思想は、人道主義思想に根づいた極めて実践的・行動主義的思想であり、かつ、極めて“自然の法則”に添った考え方の持ち主であり、社会悪を改善した偉大な科学者でもあったといえるのではないだろうか。

注

- 1) 佐々木秀美著；ナイチンゲール教育思想の源流 日常生活は心に問いを抱かせ、知性はその問いに答を要求する、看護学統合研究, Vol.12, No.1, pp42-67, 2010年.
- 2) 佐々木秀美著；ナイチンゲール精神的危機から自立へのプロセス、看護学統合研究, Vol.12, No.1, pp24-41, 2011年.
- 3) 佐々木秀美著；ナイチンゲールイギリス陸軍を改革するー学習（経験）したことから学習せよ、看護学統合研究, Vol.13, No.1, pp29-48, 2011年.
- 4) ジョン・スチュワート・ミル (John Stuart Mill 1806-1873)；イギリスの哲学者、経済学者。ジェームズ・ミルの息子。ベンサムの助言に基づき父ジェームズによって早期教育を受ける。『経済学原論』や『自由論』を書いて、私有財産制や経済的自由を擁護しつつもその限界を認め、また自由を経済的自由からよりも精神的自由から根拠付けて、自由主義に新しい展開を与えた。
- 5) Florence Nightingale (1851): The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev, (湯楨ます他訳：ナイチンゲール著作集第一巻、カイゼルスウェルト学園によせて、pp3-4, 現代社, 1983年.)
- 6) オーギュスト・コント (Auguste Comte 1798-1857)；フランスの哲学者、社会学者、実証主義の始祖。サン・シモンの弟子。彼は、全ての科学は神学的段階から形而上学的段階を経て、実証的あるいは経験的段階にいたったものとみなし、実証的宗教においては、崇敬の対象は人間性であり、その目的は人類の幸福と進歩にあるとした。
- 7) 清水幾太郎編；世界の名著46 コント、『社会静学と社会動学』, p256, 中央公論社, 1995年.
- 8) 佐々木秀美著；ナイチンゲールとミルとの論争ーヒューの論文を手がかりにー, 総合看護, Vol.37, No.3, pp53-64, 2002年.
- 9) ジョン・スチュアート・ミル著、大内兵衛他訳；女性の解放, p104, 岩波書店, 1981年.
- 10) ジョン・スチュアート・ミル著；前掲書9), p163.
- 11) 佐々木秀美著；ナイチンゲールと看護教育ーその教育目的へのアプローチ, 看護教育, Vol.36, No.1, 1995年.
- 12) 彼女は自分の著書にこの新しい職業に関して適当な言葉が目下のところ見付からないのでとりあえず看護師と命名すると述べている。
- 13) Florence Nightingale (1858); Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals, (湯楨ます他訳：ナイチンゲール著作集第一巻、女性による陸軍病院の看護, p39, 現代社, 1985年.)
- 14) Florence Nightingale (1882); Nurses, Training of, and Nursing the Sick, (湯楨ます他訳：ナイチンゲール著作集第二巻、看護師の訓練と病人の看護, p75, 現代社, 1985年.)
- 15) ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau 1712-1778)；フランス啓蒙期の天才思想家。彼の活動はきわめて多面的で、その主権在民、自由平等、愛国などの思想がアメリカ独立やフラン

- ス革命に理論的基礎を与えた。更に社会主義、人格主義、永久平和の理想、ヒューマニズム教育、ロマン主義など、近代を形成する先駆者でもある。ルソーは人間の自然の善性を原理に教育は宝の詰め込みでなく、ただ被教育者の自然的能力の開花を妨げるべきものの除去を目標とする「消極教育」を主張した。知的早期教育の否定、徳育と体育の重視、実物教育、教育の手段化に反対してまず人間たれと説くこと、など教育学上画期的な見解を示し、カントにも大きな影響を与えた。
- 16) オランブ・ドウ・グージュ (Olympe de Gouges 1748-1793)；本名はマリー・グーズ。ルイ16世を擁護したり、ロベス・ピエールなどのジャコバン系を批判したりした。フランスの人権宣言が全ての人間の普遍的な人権を確立したがととに見えていたが、実は人は男性であり、女性の権利は排除されていると最初に批判して女性及び女性市民の権利宣言を書いた。
- 17) オリビエ・ブラン著、辻村みよ子訳；女の人権宣言, p269, 岩波書店, 1995年。
- 18) 自然法 (natural law)；慣習, 立法, その他の制度によらず, 社会あるいは人間の本性に基づく法則ないし規範の意。法は永久的・普遍的であり, 歴史的制度に対して原理的理想の意義を持ち, しばしば実定法の理念的法源, 批判の基準と考えられる。絶対王政に対抗する個人主義の立場では, 自然法の重点は何よりも平等な個人の, 幸福追求の自由の自然権におかれた。
- 19) サン・シモン (Claude Henri de Rouvroy, Comte de Saint Simon 1760-1825)；フランスの空想的社会主義者。パリ貴族の出身で, ルソーの影響を受け, アメリカ独立戦争に参加。また始めはフランス革命の熱心な支持者であったが, 恐慌政治に飽きたらず, そこから離れた。彼は社会生活の基礎を経済に求め, 経済史観を発展させ, 唯物史観の先駆者となった。
- 20) フローラ・トリスタン (Flora Tristan 1803-1844)；19世紀前半のフランスにあって, マルクス主義が形成される前に, 労働者階級の解放と, 女性の解放とを結び付け, 全労働者の団結を呼びかけた女性として知られている。
- 21) オーウェン主義者；ロバート・オーウェンが提唱する近代社会主義を提唱する人々。オーウェンは資本主義の害悪として既成宗教制度, 愛なき結婚制, 私有財産制の3つを否定した社会主義思想を展開した。彼は特に社会環境を重視, その改善が人間の性格を改善すると主張した。彼の主張はアメリカ社会主義の出発点となっている。彼の思想を継承する人々は, 労働者のための社会運動として現実の進歩を彼の名前に位置づけた。
- 22) マルクス主義思想 (Marxism)；マルクス・エンゲルスによって基礎づけられた思想・学説の継承。マルクス主義の特徴は, 単に資本主義的な社会体制やブルジョア的な思想, 学説を批判するのみではなく, 人類の科学的遺産, 民主主義的・ヒューマニズム的な伝統を継承し, それを全面的に発展させようとする点である。
- 23) メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft 1759-1797)；フェミニスト。結婚後は Godwin。職業を持つことにより, 女性も依存の生活から脱却し, 男性と平等の立場にたつと主張した。
- 24) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704)；イギリス経験論の代表的哲学者。近代民主主義の代表的思想家の1人。イギリスの名誉革命, アメリカの独立宣言は彼の政治思想の直接的具体化である。
- 25) メアリ・ウルストンクラフト著, 白井堯子他訳；女性の権利の擁護, p23, 未来社, 1993年。
- 26) サン・シモン主義者 (Saint-Simonism)；サン・シモンの社会主義思想を継承する人々。彼らは, 家父長的な家族制度の廃止と家庭内での男女平等を基本にした女性解放思想を確立したことで知られる。
- 27) 功利主義 (utilitarianism)；主として19世紀イギリスで流行した倫理・政治学説で, 公衆的快樂主義。まれに利己主義を指すこともある。一般に功利の原理, すなわち, “最大多数の最大幸福” に近づく行為が正しく, その逆が不善とされるが, その幸福とは初期において心理的快樂, 後期においては精神的快樂とされた。
- 28) ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham 1748-1832)；イギリスの哲学者, 法学者, 社会改革家である。最も有名な功利主義者である。彼はあらゆる行為と立法の適切な目的は “最大多数の最大幸福である” と説いた。1792年にフランス共和国名誉市民になり多数の著書を発刊して経済・政治を説いた。
- 29) ウィリアム・エドワード・ナイチンゲール (William Edward Nightingale 1794-1874)；ナイチン

- ゲールの父親。ケンブリッジ大学を卒業。ベンサム主義思想を持ち、国会議員を目指したが、落選。地方貴族としての役割を果たしながら、子供達の教育に専念した。
- 30) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale (1860); Cassandra/Suggestions for Thought, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 31) ウィリアム・トムソン (William Thompson 1785-1833) ; ベンサムの下で功利主義を学んだ。初期の社会主義者、婦人の参政権のことでジェームズ・ミルと対立した。
- 32) ジェームズ・ミル (James Mill 1773-1836) ; イギリスの哲学者、歴史家、経済学者で J. S. ミルの父親。エジンバラ大学で聖職者のための勉強をした後、教師となり、ジャーナリストとなった。ベンサムの弟子であり、友人であり、功利主義の熱心な支持者だった。
- 33) ハリエット・テラー (Harriet Taylor 1807-1858) ; 夫のテラー氏死亡後、ミルの妻になる。ミルが1869年に執筆した『女性の従属』は彼女の協力によるといわれている。日本では『女性の解放』として翻訳出版されている。
- 34) フランソワ・ド・サンニャック・ド・ラ・モード・フェスロン ((Francois de Saligmac de La Mathe Fenelan 1651-1715) ; フランスの聖職者作家。彼は新カトリックの長としてプロテスタントの子女をカトリックに改宗する事、また既に改宗した子女達を再教育する事を任務としていた。
- 35) ジョン・スチュアート・ミル著 ; 前掲書9)。
- 36) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale ; 前掲書30), p95.
- 37) 下中弘編 ; 哲学辞典, 平凡社, pp1413-1414, 1997年。
- 38) Florence Nightingale ; 前掲書30), p219.
- 39) Martha Vicinus & Bea Nergaard; Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters, p30, VIRACO PRESS, 1989.
- 40) エドワード・ショーター著, 木村定訳 ; 精神医学の歴史, 青土社, 1999年。
- 41) エドワード・ショーター著 ; 前掲書40), pp24-25.
- 42) 滝内大三著 ; イングランド女子教育研究, p176, 法律文化社, 1994年。
- 43) 滝内大三著 ; 前掲書42), p179.
- 44) トマス・ア・ベケット (Thomas a Becket 1118-1170) ; ロンドン生まれの聖人, 殉教者。裕福なノルマン商人の息子。ロンドン, パリで学業を修め, ボローニャ, オーセールの両大学で教会法を専攻, 1155年, 大法院司教に任ぜられる。カンタベリー大司教に任ぜられた後, 辞職し, 国王に仕えるようになるが, 教会と国家との関係を定めたクラレンド法成立に関わった後, 国王との関係に亀裂が生じ, 国外逃亡。ヘンリー王との和解後に帰国するが, 聖職者を国王に従属させようとする国王との間に摩擦は埋められず, 王直属の騎士に殺害された。
- 45) エドワード6世 (Edward VI 1537-1553) ; ヘンリー8世の息子でイングランドの王 (在位期間 1547-1553年)。周囲の影響を受けて熱心なプロテスタントに成長, イギリスにおける宗教改革が花開いた。結核のために若くして死亡した。
- 46) 滝内大三著 ; 前掲書42), pp178-179.
- 47) 滝内大三著 ; 前掲書42), p202.
- 48) シャーロット・ブロンテ (Charlotte Bronte 1816-1855) ; イギリスの女流作家。1835年母校のロウ・ヘッドの教師になったが, 辞めて家庭教師になる。しかし, これも直に辞めてしまう。エミリー (1818-1848), アン (1820-1849) の三姉妹で自分達の学校を作るつもりであったがこれも失敗した。代表作『ジェーン・エア』
- 49) シャーロット・ブロンテ著, 大久保康夫訳 ; ジェーン・エア, 上・下, 新潮文庫, 1988年。
- 50) Florence Nightingale (1851) ; 前掲書5), pp3-4.
- 51) エミール・デュルケイム (Emile Durkheim 1858-1917) ; フランスの社会学者であり, 社会学創始者の一人。ボルドー大学教授を経てソルボンヌ大学教授。社会学の対象を個人の心理現象や生活現象に還元しえない独自の集団表象と規定し, 集団表象は個人を拘束する外在的事実であって, 物として客観的に取り扱うべきであるとする社会学の方法論を確立した。

- 52) B・サイモン著, 成田克矢訳; イギリス教育史, 亜紀書房, 1977年.
- 53) Florence Nightingale; 前掲書30), p219.
- 54) Florence Nightingale; 前掲書30)
- 55) Florence Nightingale (1860); Note on Nursing, p41, Scutari Press, 1992.
- 56) カール・マルクス (Karl Heinrich Marx 1813-1883); 国際的共産主義の祖. ボン大学とベルリン大学で法律を学んだ. 1848年に共産党宣言を完成させ, その中で国家は抑圧の道具であり, 宗教や文化は資本家階級のイデオロギーだと攻撃した. 1849年にロンドンに落ち着いてから経済学を研究し, 『資本論』を書いた.
- 57) カール・マルクス著, 長谷部文雄訳; 資本論, 河出書房, 1970年.
- 58) フリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels 1820-1895); ドイツの社会主義者.
- 59) エンゲルス著, 全集刊行委員会訳; イギリスにおける労働者階級の状態, pp126-127, 大月書店, 1992年.
- 60) アンソニー・アシュレイ・クーパー卿 (Lord Anthony Ashley Cooper, 7th earl Shaftsbury 1801-1885); オックスフォード大学に学び, 1826年に国会議員となり, 工場改革運動の中心的人物となる. 継続的な工場関係法案 (1847. 1859) の議会通過に尽力し, 鉱の労働条件を規制し (1842), 労働者に宿泊所を提供した (1851). イギリス国教会内の福音主義運動の指導者でもある. 後の第7代シャフツベリー伯. 初代シャフツベリー伯爵はイギリスホイッグ党を組織した人物であり, ロックの著作『教育に関する考察』も当家に対しての子育て論であるとされる.
- 61) ジョージ・ジャイコブ・ホリオーク (George Jacob Holyoake 1817-1906); 英国の社会改良家.
- 62) スチーブン・フンフリーズ著, 山田潤他訳; 大英帝国の子供達, 柘植書房, 1990年.
- 63) L・C・B・シーマン著, 社本時子他訳; ヴィクトリア時代のロンドン, 創元社, 1992年.
- 64) スチーブン・フンフリーズ著, 山田潤他訳; 前掲書62), p34.
- 65) ロバート・オーウェン (Robert Owen 1771-1858); イギリスの近代社会主義の創始者. 学歴は小学校程度であるが, 彼の経営するスコットランド, ニュー・ラナーク紡績工場における「性格形成学院」の実践は, 直観教授などの進歩的方式を採用し, 世界最初の幼稚園と言われた.
- 66) ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827); 哲学者としてまた, 教育思想家でもあり, 貧民教育の実践者としても有名である.
- 67) 五島茂他編; 世界の名著42 オウエン サン・シモン フーリエ, p201, 中央公論社, 1996年.
- 68) Florence Nightingale (1894); Health Teaching in Town and Villages. Rural Hygiene, (湯槇ます他訳; ナイチンゲール著作集第二巻, 町や村での健康教育, p159, 現代社, 1983年.)
- 69) Cecil Woodham-Smith (1950); Florence Nightingale, (武山満智子他訳; フロレンス・ナイチンゲールの生涯 [上巻], p179, 現代社, 1987年.)
- 70) Cecil Woodham-Smith (1950); 前掲書69), p179.
- 71) Florence Nightingale (1863); Note on Hospital, (湯槇ます他訳; 病院覚え書, ナイチンゲール著作集第二巻, 現代社, 1983年.)
- 72) Florence Nightingale (1851); 前掲書5), p14.
- 73) チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens 1812-1870); イギリスの小説家. 法律事務所で下働き後に民法博士会館の議事速記者になり, 22歳でロンドンの新聞記者になる. 彼は小説中に多彩な人物を登場させ, その当時の社会悪を激しく批判した. 小説『マーティン・チャズルウィット』ではギャング婦人という卑しい女性を登場させ, 病院看護の実態を批判した.
- 74) Charles Dickens; MARTIN CHUZZKEWIT, Oxford University Press, 1987.
- 75) Charles Dickens; 前掲書74), p425.
- 76) エンゲルス著; 前掲書59), p24.
- 77) シャーロット・ブロンテ著, 大久保康夫訳; 前掲書49)
- 78) Florence Nightingale (1888); To the nurses and probationers trained under the "Nightingale Fund", (湯槇ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, 看護師と見習い生への書簡, p430, 現代社, 1985年.)

- 79) Florence Nightingale (1888)；前掲書77)， pp430-431.
- 80) ハリエット・マーティノウ (Harriet Martineau 1802-1876)；英国の女流小説家，経済学者。デイリー・ニュースの主筆をしていた。彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき，数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』セシル・ウーダム・スミス著より
- 81) Harriet Martineau; British History and Military Reform Vol.6, England and her Soldiers, p97, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
- 82) Florence Nightingale (1860)；前掲書55)， pp188-189.
- 83) Florence Nightingale (1860)；前掲書55)， p196.
- 84) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale；前掲書30)， p31.
- 85) テオドール・フリードナー (Paster Theodore Flidner 1800-1864)；プロテスタントの牧師。ドイツのカイゼルスウェルトに赴任した際に，人々が経済的に苦境に陥っていたため，救済資金を求めてイギリスに足を伸ばした。そこでエリザベス・フライ女史の女囚保護事業活動を知ってドイツに広めようとした。その一環として1836年に看護師の養成所も含めたカイゼルスウェルト学園を創立した。
- 86) Florence Nightingale (1888)；前掲書78)， p393.
- 87) Florence Nightingale (1858)；前掲書13)， p54.
- 88) Florence Nightingale (1865); Suggestions on a System of Nursing for Hospitals in India, (湯慎ます他訳；ナイチンゲール著作集第一巻，インドの病院における看護， pp437-469，現代社，1985年.)
- 89) Harriet Martineau；前掲書81)， p153.
- 90) チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin 1809-1882)；エジンバラ大学で医学を学ぶがこれを嫌い，ケンブリッジ大学で神学を学ぶ。この時期に昆虫学と植物学に触れ，パタゴニア探検 (1831-1836)の職を確保し，5年に渡る探検中に諸国の動植物や地質の詳細を得て，出版した。妻はアレン家の娘エマ。
- 91) ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1903)；イギリスの進化論哲学者。社会ダーウィニズムの指導的提唱者。
- 92) 清水幾太郎編；世界の名著46，スペンサー，『科学の起源』， pp337-396，中央公論社，1995年。
- 93) 清水幾太郎編；前掲書62)， スペンサー，『進歩についてーその法則と原因』， pp399-442.
- 94) 清水幾太郎編；前掲書62)， スペンサー，『知識の価値ー教育論第一部』 pp445-486.
- 95) 清水幾太郎編；前掲書94)， p457.
- 96) ヘンリー・ウェントワース・アクランド博士 (Henry Acland MD 1815-1900)；オックスフォード大学医学部欽定講座担当教授。医学部総評議会 (General Medical Council) メンバーの一人。
- 97) ザカリイ・コープ著，小池明子他訳；ナイチンゲールと医師達，日本看護師協会出版会， p 170, 1979年。
- 98) 佐々木秀美著；看護教育における思考訓練の重要性ーデューイの反省的思考論を手がかりに，明星大学教育学研究紀要，No.18，2003年。
- 99) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804)；ドイツの哲学者。ケーニヒスベルクに生まれる。同地の大学に進み神学・哲学を学ぶ。後，1746年にケーニヒスベルク大学の私講師になり，1755年に同大学の論理学・形而上学の正教授となる。
- 100) Florence Nightingale (1863)；前掲書71)
- 101) Florence Nightingale (1863)；前掲書71)， p203-204.
- 102) エンゲルス著；前掲書59)， p146.
- 103) エンゲルス著；前掲書57)， pp126-127.
- 104) Florence Nightingale (1860)；前掲書55)
- 105) Florence Nightingale (1860)；前掲書55)， p26
- 106) Florence Nightingale (1863)；前掲書71)， p241.
- 107) ホイットフィールド (Mr. Whitfield)；MD，ルーシー・セーマーの『ナイチンゲール伝』では内科医。クックのそれは薬剤師と訳されている。ナイチンゲールがホイットフィールド氏に宛てた手

- 紙には apothecary と書かれている。イギリスでは一種の薬店主が開業医も兼ねたらしいのでどちらも正しい。
- 108) ジョン・クロフト博士 (John Croft 1833-1905)；ナイチンゲール看護学校の教官としてホイットフィールドの後任になった聖トマス病院の外科医。訓練生に対して講義、症例のチェック、定期的な試験等を行った (1873年-1891年)。
- 109) エリザベス・ブラックウェル (Elizabeth Blackwell 1821-1910)；アメリカ初の女性医師。イギリス、エイヴァン州ブリストル生まれ。様々な医学校に入学申し込みをするが断られ、ニューヨーク州のジェネバ医学校に入学、1949年に卒業。後、ヨーロッパへ行き、パリ産院、ロンドンの聖バーソロミュー病院で働く。1851年にナイチンゲール宅を訪問し、病院や看護師の問題に関して話し合っている。同年、ニューヨークに戻り、開業して成功する。1869年からイギリスに在住し、ロンドン女子医学校を創設した。妹にエミリーという世界初の女性外科医がいる。彼女もロンドン女医学校の教授となるなど、姉の事業に協力した。
- 110) Sir Edward T. Cook (1914); *The Life of Florence Nightingale*, (中村妙子訳；ナイチンゲール [その生涯と思想 I], p92, 時空出版, 1994年.)
- 111) 荻野ぎん子 (1851-1913)；日本最初の女医の医師試験合格者。16歳で結婚、2年後夫から性病を移され、離婚。順天堂医院に2年間入院し、治療を行う。その後、自ら医師になることを決意、1873年(明治6年)漢方医井上頼罔に入門。1875年(明治8年)東京女子師範学校を経て、1875年(明治12年)私立医学校の好寿院に進学。1878年(明治15年)卒業した。医師免許に合格した後、本郷湯島に産婦人科荻野医院を開業、まもなく下谷に移り治療に専念する。海老名弾正から
- 112) Evelyn, Pugh; *Florence, Nightingale AND J·S·Mill: Debate Women's Rights*, p137, *Journal of British Studies*, 1988.
- 113) ザカリイ・コープ著、小池明子他訳；前掲書97), p207.
- 114) Mary Poovey Edited, *Florence Nightingale*；前掲書30), p210.
- 115) サラ・エリザベス・ウォードローパー夫人 (Mrs. Sara Elizabeth Wardroper 1854-1887)；クックの『ナイチンゲール伝』には彼女のことを熟慮型ではなく、直感型の女性であるが組織力と管理能力、勇気と潔癖さは特筆するものがあり、その上決断力に優れており、彼女の考えていること、口に出す言葉、行動の間に矛盾が感じられず、いつも首尾一貫している女性であると紹介している。
- 116) Cecil Woodham-Smith (1950)；前掲書69), p54.
- 117) ハリー・ヴァーネイ卿；(Sir Harry Verney 1801-1894)；ヴァーネイ族の当主。ヴァーネイはバッキンガム州の有名なクレイドン・ハウスの持ち主で地主。エドワード6世の頃から同州あるいは自治都市バッキンガムの代表者を務めてきた。56歳のときにナイチンゲールに結婚を申し込んだが断られた。後にナイチンゲールの姉のパーシノーブと結婚した。
- 118) アーサー・ヒュー・クラフ (Arther Hugh Clough 1819-1861)；英国の詩人。ラグビー校で学んだ後、オックスフォード大学で学んだ。ナイチンゲールの友人であり、彼女の従妹ブランチと結婚、ナイチンゲールの仕事を手伝った。
- 119) トマス・アーノルド (Thomas Arnold 1795-1842)；イギリスの教育学者。オックスフォード大学に学び、1828年にラグビー校の校長に就任した。青少年の教育に携わりながら、彼らに広い視野に立つ思想的可能性を開花させた。彼の思想的影響を受けた青年神学者たちが、コールリッジの哲学や思想を吸収し、新たな神学的枠組みを形成したといわれる。『イングランドの宗教』p216.
- 120) ブランチ・クラフ (Blanche Clough 1828-1904)；ナイチンゲールの従姉妹。父親の妹(メアリー・スミス)の娘。1854年にアーサー・ヒュー・クラフと結婚し、3人の子どもをもうけた。その長女にフローレンスと名づけた。
- 121) トマス・ヒューズ (Thomas Hughes 1822-1896)；ラグビー校におけるアーノルドの弟子 (1834-1842)。フレデリック・D・モリスらと共に労働者大学の設立に当たり、後にその学長になった。
- 122) Thomas Hughes, *Tom Browns Schooldays* (前川俊一訳：トム・ブラウンの学校生活、岩波書店、1956年.)

- 123) 柴田京子, 津田右子, 佐々木秀美共著;『ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察ー友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりを手がかりにー Some consideration concerning Nightingale's view of religionーIs to the clue relations with friend Arthur Hugh Cloughー』その1ー, 総合看護 Vol.40, No.3, pp41-48, ーその2ー, 総合看護 Vol.40, No.4, pp73-80, 2005年.
- 124) ヘンリー・ボナハム・カーター (Henry Bonham Carter, 1827-1921); ナイチンゲールの母方の従兄弟. ナイチンゲールに心酔し, ナイチンゲール基金の書記の仕事を引き受け, 40年以上もナイチンゲールに協力した.
- 125) Harriet Martineau; 前掲書81), p171.
- 126) Harriet Martineau; 前掲書81), p172.
- 127) Florence Nightingale (1858); 前掲書13), pp39-40.
- 128) Harriet Martineau; 前掲書81), p166.
- 129) Harriet Martineau; 前掲書81), p166.
- 130) Harriet Martineau; 前掲書81), p174.
- 131) Harriet Martineau; 前掲書81), p1755.
- 132) Harriet Martineau; 前掲書81), p175.
- 133) L・ストーン著, 北本正章訳; 家族・性・結婚の社会史, 勁草書房, 1991年.
- 134) Harriet Martineau; 前掲書81), p258.
- 135) Harriet Martineau; 前掲書81), p275.
- 136) Harriet Martineau; 前掲書81), p278.
- 137) Florence Nightingale (1871); Introduction by Florence Nightingale [In] Memorials of Elizabeth Jones. By her sister. Florence Nightingale. London & Co, (湯楨ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, アグネス・ジョーンズをしのんで, pp249-250, 現代社, 1985年.)
- 138) 柴田京子, 津田右子, 佐々木秀美共著; 前掲書123).
- 139) トマス・アレクサンダー (Dr. Thomas Alexander 不詳-1860); クリミア戦争の最前線で勤務した有能な外科医. 戦後はカナダへ左遷されたが, ナイチンゲールの側近として働き, ナイチンゲールによって陸軍医務局長となる. 1860年急死した.
- 140) ベンジャミン・ジョウエット (Benjamin Jowett 1817-1893); イギリスのギリシャ哲学者. ナイチンゲールの思想に共鳴し, 彼女の仕事を手伝い, 多くの助言を与えた. ナイチンゲールの生涯の友人である.
- 141) シドニー・ハーバート (Sidney Herbert 1810-1861); クリミア戦争当時の戦争大臣. ナイチンゲールの改革における生涯のパートナーであり, 良き理解者, 協力者である. 名門ペンブルック伯爵家に生まれ, 政治家となった人物. 1852-1855, 1859-1860年に陸軍大臣を務め, ナイチンゲールの改革を推進した. しかし, 激務のため病気となり, 公務からの引退を希望するが, ナイチンゲールはそれを許さなかったといわれている. 辞職後に病死した.
- 142) Martha Vicinus & Bea Nergaard; 前掲書39), p230.
- 143) 佐々木秀美, 林 君江, 小河朋子共著; モール夫人への手紙に見るナイチンゲールの女性観, 看護学統合研究 Vol.11, No.1, pp8-28, 2002年.
- 144) Martha Vicinus & Bea Nergaard; 前掲書39), p203.
- 145) メアリー・クラーク・モール (Mary Clarke Mohl 1793-1883); 子ども時代から成人するまで各地を転々とするが, レカミエ夫人の支援により, パリに“クラーキー”という最も優秀で知的なサロンを持った. 特にナイチンゲールの従兄弟であるヘンリー・ボナハム・カーターや文学者たちと親密な交友関係を持った.
- 146) Martha Vicinus & Bea Nergaard; 前掲書39), p230.
- 147) 佐々木秀美著; 歴史に見るわが国の看護教育ーその光と影, 青山社, 2005年.